

VI. 考 察

今熊野遺跡における方形周溝墓群とその集落

出土土器の検討と問題の所在

今熊野遺跡では方形周溝墓および鴻ノ巣第15号住居跡から古墳時代の土師器がまとまって出土している。第1号方形周溝墓から有段口縁の壺6点(図示したもの)・単純口縁の壺1点、第4号方形周溝墓から坏1点・壺1点、第6号方形周溝墓から小形広口壺1点、第11号方形周溝墓から壺1点が出土している。また、鴻ノ巣第15号住居跡からは床面を中心として、高坏1点・器台1点・坏1点・小形甕1点・台付甕1点が出土し、いずれも住居廃絶時かその直後の一括遺物と考えられるものである。

これらの土器群は有段口縁の壺・脚部有窓高坏・器台・坩状坏を特徴とするもので、氏家和典氏によって設定された「東北土師器の型式分類」の第Ⅰ型式、すなわち塩釜式に位置づけられる(氏家和典:1957.3)。また、単独出土であるが、鴻ノ巣第21号住居跡の有段口縁壺、さらには同一組成に含まれると推定される鴻ノ巣C A-39号住居跡、出土地点不明の坏・高坏・壺(第47図1~3)も塩釜式に位置づけられる。

塩釜式土器は一括資料が未発見の段階で、南小泉遺跡出土資料の中で関東地方の和泉式に先行するものに対して設定された型式で、「この型式の典型的な特徴を有する土器は塩釜市における築港工事の際に出土した壺形土器に求められるので、この型式をいま広く一括して塩釜式土器と仮称しておきたい。」(氏家和典:1957.3)とされたものであった。したがって、氏家氏も後に述べているように「塩釜式という型式のなかには古式土師器という点では一致をみるにしても、編年的には細分される可能性ある型式のものまで包括されていたといえよう。」(氏家和典:1972.4)という状況であった。

塩釜式土器の細分を具体的に検討できるようになったのは刈田郡蔵王町大橋遺跡の調査以後である(藤沼邦彦:1971.3 太田昭夫:1980.9)。すなわち、宮城県内において集落跡の発掘調査が本格的に実施され、住居跡等からまとまりのある一括資料が発見されるようになってからである。現在までに塩釜式土器の一括資料を出土した遺跡を宮城県南部からあげていくと、大橋遺跡の他に亶理郡亶理町宮前遺跡(丹羽茂:1983.3)・柴田郡川崎町二本松遺跡(宮城県教委:1984年11月調査)・名取市西野田遺跡(丹羽・柳田・阿部:1974.3)・同市十三塚遺跡(恵美昌之:1979.3)・同市清水遺跡(丹羽・小野寺・阿部:1981.3)・同市今熊野遺跡(本書)・仙台市遠見塚古墳(結城・工藤:1979.3)・同市今泉城跡(篠原・工藤:1980.8)・同市戸ノ内遺跡(仙台市教委:1983.12 早坂・渡部:1985.1)・加美郡色麻町色麻古墳群(古川一明:1983.3)・遠田郡小牛田町山前遺跡(宮城県文化財保護課編:1976.3)・古川市留沼遺跡(手塚均:1980.3)・

栗原郡志波姫町鶴ノ丸遺跡（手塚均：1981.9）の合言14遺跡となる。

これらの遺跡の調査および報告書作成の過程において、塩釜式土器は幾段階かに細分されて考えられるようになった。すなわち、氏家氏は大橋遺跡第1・2号住居跡床面直上・ピットから出土した土器群を基準資料として、さらに古い土器群の存在（浮文系土師器）を予想した（氏家：1972.4）。しかし、天王山式に後続する弥生時代終末の土器が不明確な今、氏家氏の言う浮文系土師器の一括資料が未発見の現状では、それらが果して、大橋遺跡の土師器に先行する古墳時代の土器なのか否か、判断する手立てがない。

その後、発掘調査の結果出土した一括資料に基づく細分が宮城県文化財保護課の手によって着実に進められてきた。すなわち、西野田遺跡では1971年報告（概報）の大橋遺跡出土土器と比較した上で、西野田遺跡の土器が「各々の器形と成形・調整技法そして器形の組合せについて共通する点が多いこと」から塩釜式の範囲に包括されること、「西野田遺跡の高坏や器台に円窓がないこと」、複合口縁壺の頸部に刻み目のある隆帯がめぐっていない点を取りあげ、「塩釜式内部の新しい要素として理解」した（丹羽・柳田・阿部：1974.3）。留沼遺跡では、留沼のセットが西野田のものと強い類似性を示し、「西野田における器種の欠損現象をある程度補う」ものとし、大橋遺跡には認められない特徴を持つことから、「西野田を含めて新しい要素として理解」した（手塚均：1980.3）。また、大橋遺跡の1980年報告（正報告）では「これまで塩釜式として一括されてきた土器に、大橋遺跡の出土土器群と西野田・留沼遺跡の出土土器群の2つのグループがあり、上記の分析からそれらが時期差をもつことが指摘できた」と明確に示した（太田昭夫：1980.3）。このように塩釜式土器の細分については新古の要素の指摘から時期差の設定まで約6年の年月を要している。

塩釜式土器の細分と同時に資料も次第に増加した。すなわち、古い段階のものとして鶴ノ丸遺跡・清水遺跡第Ⅰ群土器、新しい段階のものとして清水遺跡第Ⅱ群土器、また時期差に直接触れないまでも塩釜式土器の一括資料として十三塚遺跡・遠見塚古墳・今泉城跡・色麻古墳群・山前遺跡などの報告があいついだ。さらに宮前遺跡では豊富な住居跡の出土土器を整理する中で、出土状況の相違に基づきA群土器・B群土器・C群土器を摘出し、それらを「塩釜式土器における時期的な諸段階である。」と結論づけ、A群土器の類例として大橋遺跡第1～3号住居跡、B群土器の類例として清水遺跡第Ⅳ層（第Ⅰ群土器）・遠見塚古墳第12トレンチ第Ⅰ土器群・色麻古墳群第12号住居跡・鶴ノ丸遺跡第5・6号住居跡、C群土器の類例として清水遺跡第Ⅲ層（第Ⅱ群土器）・西野田遺跡第5号住居跡・留沼遺跡第1・2次調査出土土器をあげた（丹羽茂：1983.3）。その結果、塩釜式土器細分の大綱はほぼできあがったことになるが、各段階における器形の変遷・細かな地域差の有無、また周溝墓・古墳出土の塩釜式土器については集落跡の調査報告という性格などから検討を加えていない。ここでは今熊野遺跡出土資料さらには

宮前遺跡報告では取り扱わなかった各遺跡の一括資料を加え、塩釜式土器の変遷を整理し、その結果に基づいて周溝墓・古墳出土の塩釜式土器、さらには周溝墓・古墳の歴史的意味・性格について検討を加えることにする。

塩釜式土器の階段階

宮前遺跡の報告で示した塩釜式土器のA群土器・B群土器・C群土器の諸段階をここでは第Ⅰ段階・第Ⅱ段階・第Ⅲ段階とする。まず、各段階の基準となる資料とその類例を示し、その特徴を述べることにする。

第Ⅰ段階

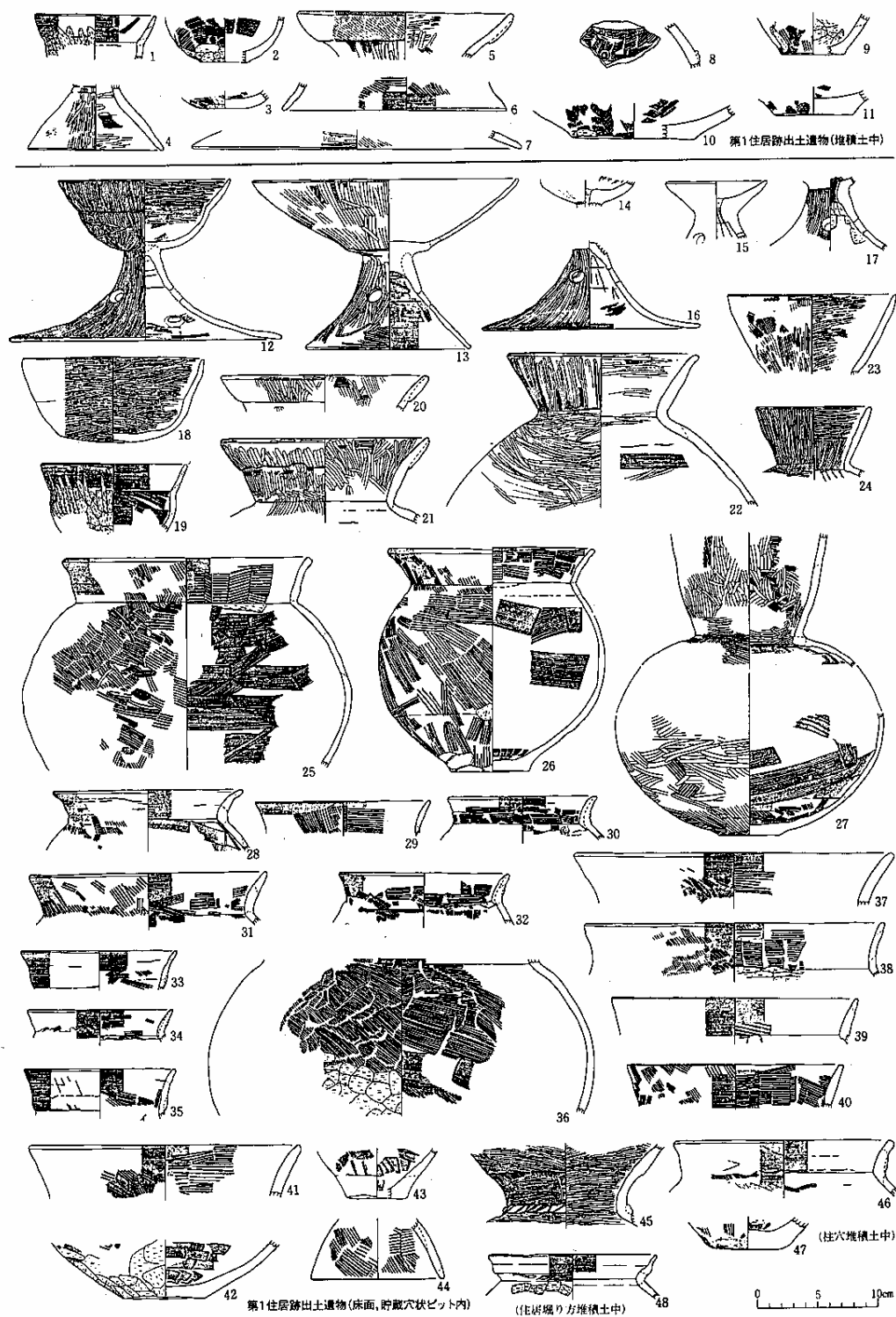
宮前遺跡第53号住居跡・大橋遺跡第1～3号住居跡出土土器を基準資料とし、その類例として戸ノ内遺跡第3・4号住居跡・二本松遺跡第1遺物集中地点出土土器をあげることができる。

大橋遺跡：第1号住居跡床面・貯蔵穴状ピットから良好な状態で一括土器が出土している。第2・3号住居跡からも同様な土器群が出土し、器種構成の上で相違を示しているものの、「時期差にもとづくものではなく、むしろ、同一時期の器種構成を互いに補完する関係にあるものと思われる。」とされている(太田昭夫:1980.3)。この点は住居跡周囲の第Ⅰ・Ⅱ層から出土した塩釜式土器についても同様で、第Ⅱ段階以降の明確な資料は含んでいない。今後、第Ⅰ段階をさらに細分し得る資料が発見されるまでの間、同一時期の器種欠落現象をできるだけ小範囲に留めるため、これらを第Ⅰ段階のものとして一括しておきたい(第48・49図)。

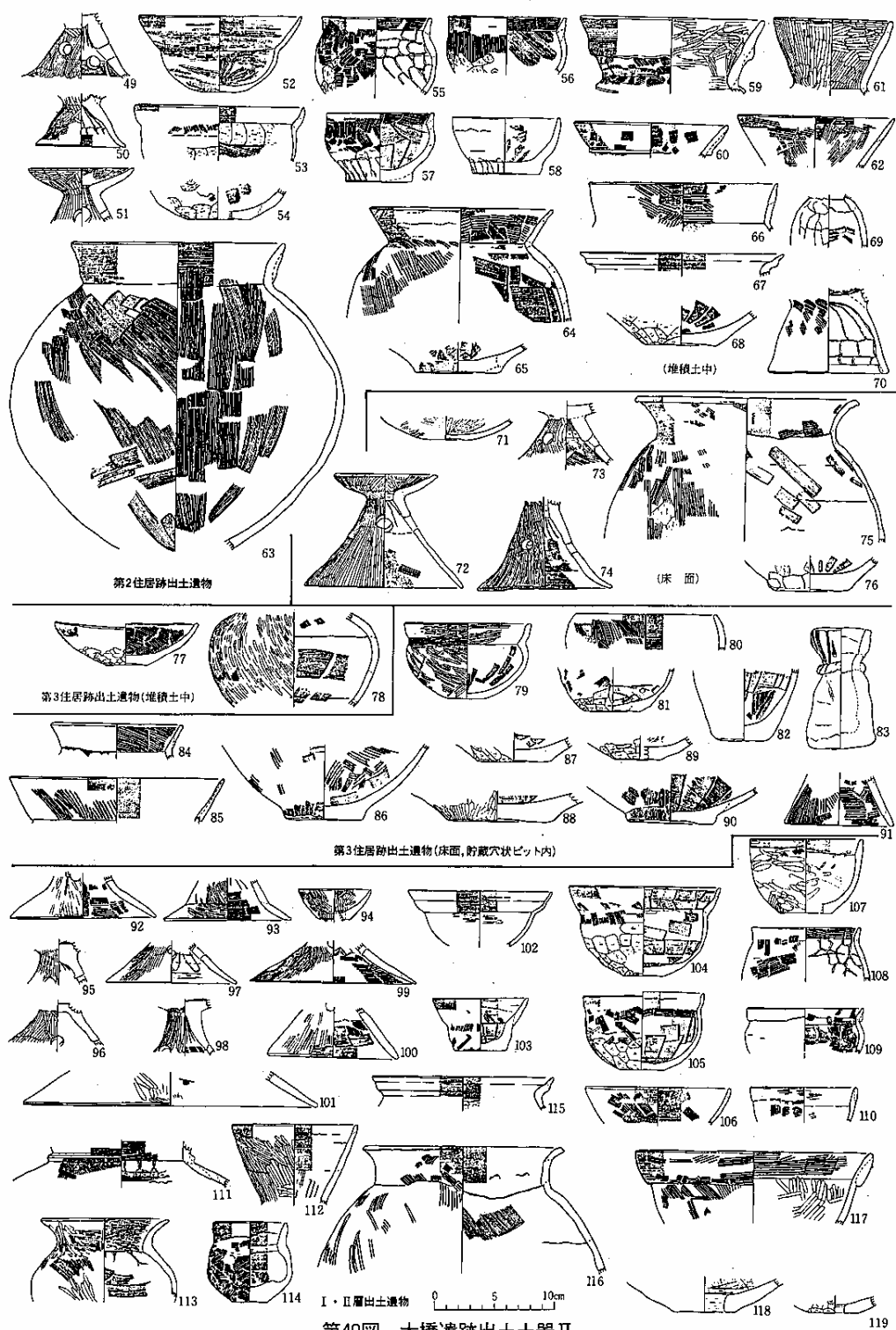
大橋遺跡出土土器には器種として高坏・器台・坏・壺・甕・甑があり、特殊なものとして徳利形土器がある。高坏は坏部が有段丸底状のもの(12)と無段平底状のもの(13)がある。脚部は円錐台状のもの(13)と裾が大きく広がるもの(12)があり、大部分のものに3～6孔の円窓が付いている。器面調整として丁寧なヘラミガキが加えられ、丹の塗られているものが多いが、直接目に触れない脚部内面はヘラケズリ・刷毛目・ヘラナデなどとなっている。

器台は全体の器形の判明するものは1点である(72)。受け部は脚部に較べ小さく、小皿状に内湾しながら開く。脚部は円錐台状で脚上部に4孔の円窓が付き、受け部との間に貫通孔がある。器面調整は高坏同様丁寧なヘラミガキで、脚部内面が刷毛目・ヨコナデである。その他一部破損している資料も、同様な器形を示すものが多いが、14は受け部が有段丸底になる可能性もある。また、94は受け部が無段平底であるが、特に小形で脚部との間に貫通孔がない。

坏は体部中央にくびれもしくは段があり、下部がすぼまる埴状のもの(18・52・102・103)と口縁部が外傾し胴部が膨らみながらすぼまるもの(19・53・55・56・79・104・105・109)、無段平底のもの(58・77・107)などがある。前者は103を除き、ヘラミガキなどで丁寧に仕上げられている。また、102は口縁部が屈曲し二段になっている。後二者は79が丁寧にヘラミガキ・丹塗りが施こされているだけで、大部分のものはヘラケズリ・刷毛目調整でやや粗雑に仕上げら



第48図 大橋遺跡出土土器Ⅰ



第49図 大橋遺跡出土土器Ⅱ

れている。

壺には複合口縁と単純口縁のものがある。前者には口縁部幅が広く口縁下部が肥厚(複合)するもの(45・59)と口縁部幅が狭く全体が複合するもの(5・20・21・60)がある。両者とも口縁部は内弯気味に外傾し、5では顕著である。これらの複合口縁壺は刷毛目の他にヨコナデ・ヘラミガキなどの丁寧な器面調整が加えられる。また、5では口縁部に縄文が施文され、45では頸部に刻目をもつ凸帯がめぐっている。111の頸部に凸帯のめぐる壺肩部も、これらの複合口縁壺の一部と推定される。単純口縁壺には口縁部が外反するもの(22・113)と口縁部が直立気味に外傾もしくは大きく開くもの(23・24・27・61・62)がある。前者は完形品はないが、胴部は球形に近いものと推定される。後者は胴部が張りの強い玉葱状をしている。前者もヘラミガキ等で丁寧に仕上げられているが、後者は特に丁寧に丹塗りされているものが多い。

甕には口縁部が外傾もしくは外反するもの(25・26・28～40・46・64・75)、口縁部が直立する広口のもの(66)、口縁部がS字状のもの(48・67・115)、台付のもの(44・70・91)がある。口縁部が外反するものは胴部球形で胴下部がすぼまり、その変換部分が粘土貼り付けによって肥厚し外面に稜を形成する(26)。また、25・63のように胴中央部の膨らみが特に大きいものもある。これらの甕は内外面ともヘラナデ・刷毛目で器面調整されるものが多い。S字状口縁の甕は口縁下部が肥厚し、胴部外面はヘラケズリされている。台付のものはどの甕に伴うか確実なことはわからない。

甗は単孔丸底で深鉢状のものである(117～119)。複合口縁で、内弯気味に外傾している。器面調整は口縁部内外面と胴部外面が刷毛目、胴部内面がヘラミガキである。

徳利形土器は頸部に刻目のある凸帯がめぐっている。

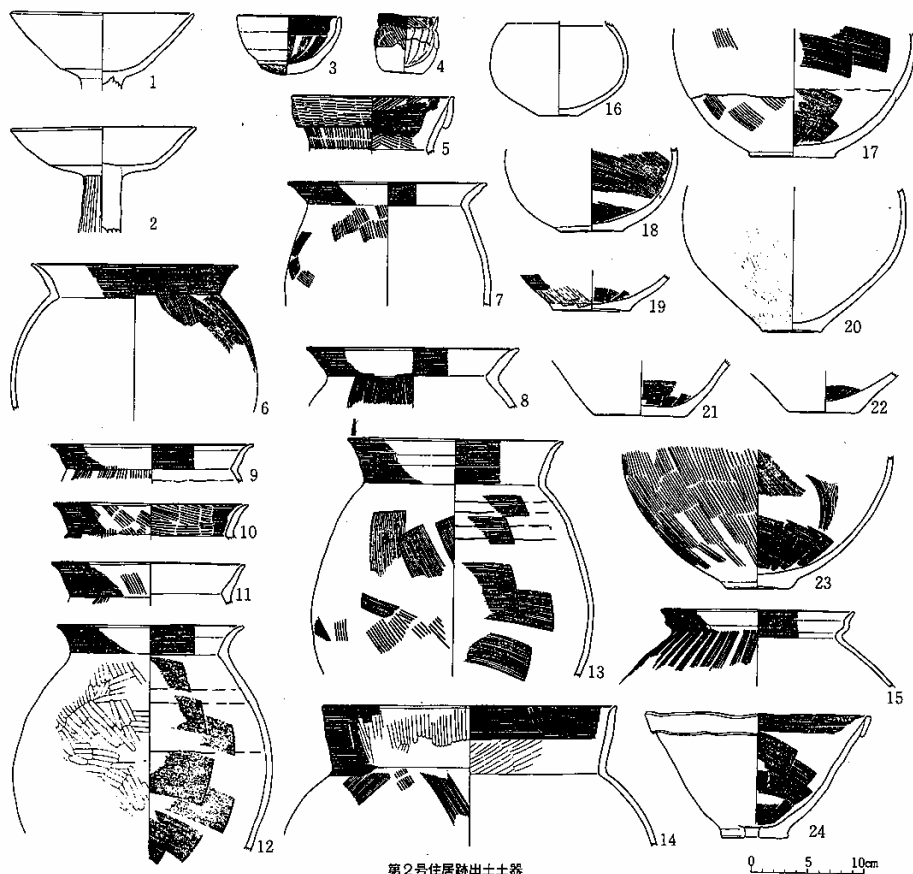
宮前遺跡：第53号住居跡の床面・貯蔵穴状ピットから高坏1点・坏3点が出土している(第51図)。高坏は坏部中央に段がつくもので、口縁部が外反する(47)。脚部は裾の広がるもので3孔の大きな円窓がある。外面と坏部内面はヘラミガキ・ヨコナデで丁寧に仕上げられ、丹塗りされている。脚部内面はヘラケズリ・刷毛目・ナデである。坏は体部中央がくびれ下部がすぼまるもの(48)と口縁部が外傾し胴部が膨らみながらすぼまるものがある(49・50)。器面調整はヘラミガキ・ヨコナデ・刷毛目である。

この他、戸ノ内遺跡では第3号住居跡から高坏坏部1点・6孔の円窓をもつ器台脚部1点・刻目のある縦位浮文のついた壺口縁部2点(同一個体か?)、第4号住居跡から坏部が無段丸底の高坏2点・有段丸底の高坏2点・脚部2点・受部が丸底状の器台1点・小皿状の器台1点・脚部1点・坏3点が出土している。高坏・器台は脚部に3～9孔の円窓があり、ヘラミガキ・ヨコナデなどで丁寧な器面調整が加えられている。二本松遺跡では一括して廃棄されたと思われる遺物集中地点から高坏坏部・坏・壺胴底部・甕が各1点ずつ出土している。

以上のように、第Ⅰ段階の塩釜式土器は高坏・器台・坏・壺・甕・甑の器種構成を示すとともに極めて丁寧に仕上げられた精製とも言える高坏・器台・坏(一部)・壺(一部)、やや丁寧な坏(一部)・壺、粗い仕上げの甕によって特徴づけられる。高坏は有段丸底、無段丸底・無段平底のものがあり、平底のものも口径に対して底径が小さい。また、坏部は全体に深目である。高坏および器台の脚部は裾の大きく広がるものが特徴的で、円窓も大きく、3～9孔をもつ。壺は口縁部に刻目縦位浮文・頸部に刻目凸帯を伴うものがある。甕は刷毛目等で仕上げられるが、胴部は球形に近く、器形全体に張りがある。

第Ⅱ段階

宮前遺跡の報告ではB群土器を「A群土器とC群土器の過渡的様相を備えている」ものとして一括したが、再検討したところ細分すべきことが明らかとなったので、ここでは第ⅡA段階・第ⅡB段階とする。その理由を簡単に述べると第ⅡB段階では高坏・器台脚部の円窓消失化



第50図 宮前遺跡出土土器Ⅰ

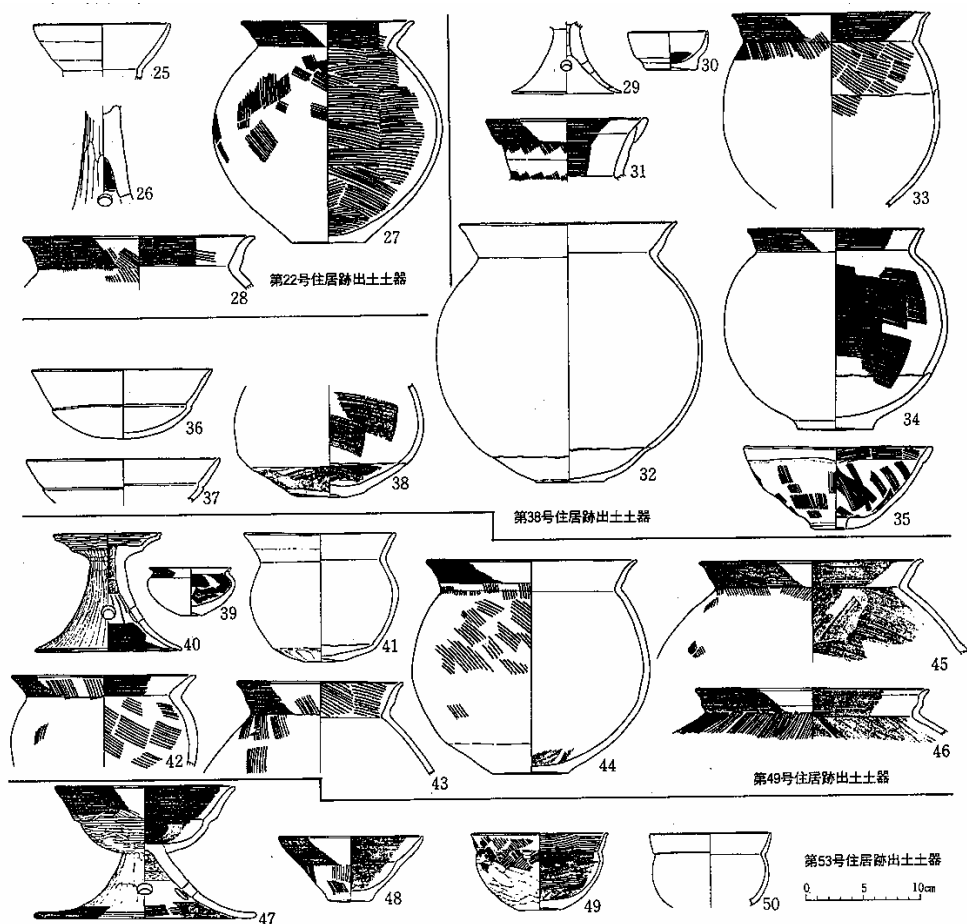
の開始、精製坏のヘラケズリ化、胴部球形壺・甕の長胴化の開始である。また、甕の平底化もあげることができる。

第IIA段階

宮前遺跡第38・49号住居跡・色麻古墳群第11号住居跡・清水遺跡第IV層出土土器を基準資料とし、その類例として、今泉城跡第19号土坑・遠見塚古墳第12トレンチ第I土器群出土土器をあげることができる。今熊野遺跡鴻ノ巣第15号住居跡出土土器もこの段階に含まれる。

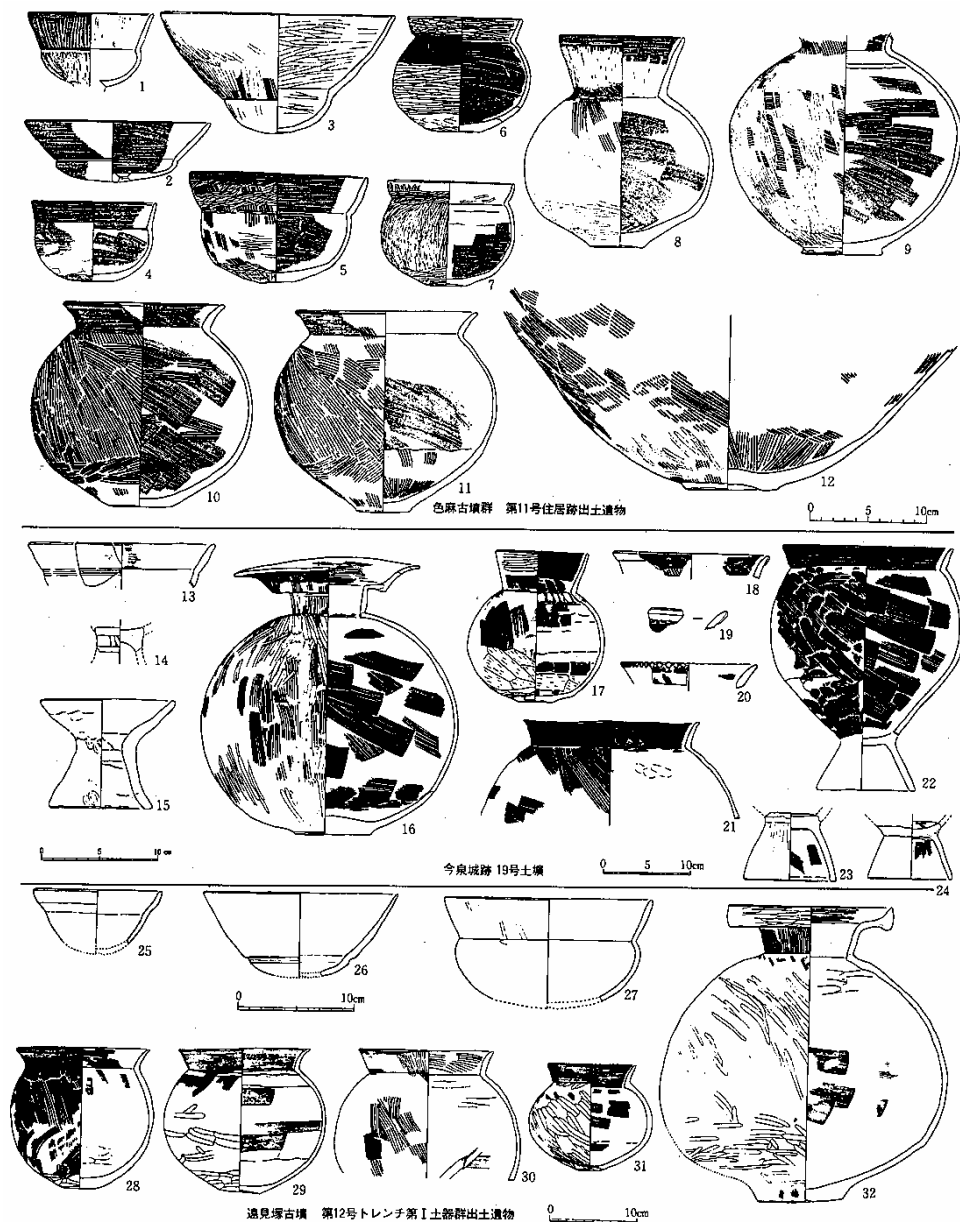
宮前遺跡：第38・49号住居跡から器台・坏・壺・甕・甗が出土している(第51図)。器台は有段平底の受部とやや裾の広がる円錐台状の脚部からなる(40)。胸中央部に3孔の円窓が付き、受け部との間に貫通孔がある。器面調整は外面と受け部内面が丁寧なヘラミガキで、脚部はヘラケズリ・ヨコナデである。29の器台も受け部を欠くが、脚部の形態は共通している。

坏は体部中央に段のつくもので、浅い碗状をしている(36・37)。外面の段はくびれが強い。



第51図 宮前遺跡出土土器Ⅱ

器面は磨滅しているが、37の内面はヘラミガキされている。31は複合口縁の壺で、口縁部が外傾している。器面調整はヨコナデ・刷毛目である。38は単純口縁壺の胴部と推定され、胴下部に稜がある。甕は口縁部が外傾もしくは外反するもの(32~34・41~45)とS字状のもの(46)がある。胴部の判明するものはいずれも滑らかな球形で、胴下部の稜は弱い(32~34・41・44)。器



第52図 色麻古墳群・今泉城跡・遠見塚古墳出土土器

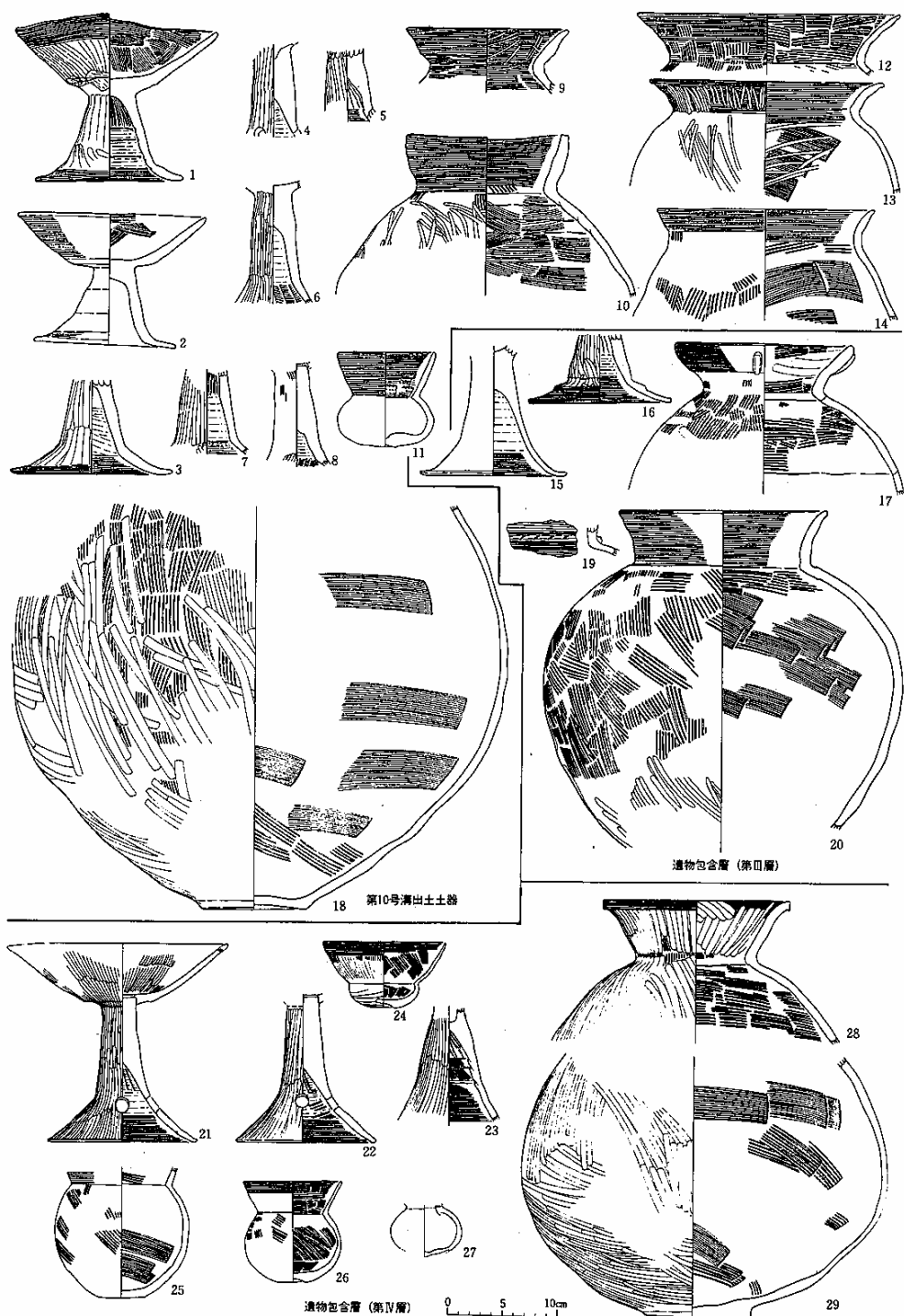
面調整は内面がヨコナデ・刷毛目・ヘラナデで、外面は刷毛目が多い。S字状口縁の甕は口縁部の厚さが均一で、肩が張る(46)。器面調整は口縁部・胴部の内面がヨコナデ・ナデで、胴部外面は縦に長い刷毛目が密接して加えられている。甕は単孔丸底の鉢状をしている(35)。口縁部は複合口縁で僅かに外傾する。器面調整として内外面とも刷毛目が多用される。

色麻古墳群：第11号住居跡から高坏・坏・壺・甕が出土している(第52図)。高坏は坏部が有段丸底状のものであるが、脚部を欠いている(1)。内外面ともヘラミガキ・ヨコナデで丁寧に仕上げられている。坏は体下部に段(くびれ)があり下部がすぼまるもの(2・3)と口縁部が外傾し胴部が膨らみながらすぼまるもの(4・5)がある。2は浅い碗状、3～5は深い碗状をしている。2・3は宮前遺跡同様外面の段はくびれが強く、3ではその部分に積み上げ痕を明瞭に残している。器面調整はヘラミガキ・ナデ・刷毛目である。壺には広口で口縁部が短かいもの(6・7)と口縁部が直立気味に外傾し高くのびるもの(8)がある。胴部は器高の高い滑らかな玉葱状で、8は胴下部に稜がある。9は口縁部を欠くが、胴部が滑らかな球形をしており、壺と推定される。これらの壺の器面調整は外面がヘラミガキを主体とし、一部ナデや刷毛目もある。甕は口縁部が外反し、胴部は滑らかな球形で、胴下部の稜は弱い(10・11)。器面調整は刷毛目・ヨコナデ・ヘラナデで、胴部外面は刷毛目である。

清水遺跡：遺物包含層第IV層から高坏・坏・壺が出土している(第53図)。高坏は脚上部が柱実で中・下部が円錐台状に開くもの(21・22)と、脚部全体が円錐台状に開くもの(23)がある。前者は円錐台状部の中・上部に3孔の円窓がある。21の坏部は無段平底であるが底部は小さい。いずれも外面と坏部内面は丁寧なヘラミガキが加えられているが、脚部内面はヘラケズリ・刷毛目・ヨコナデである。坏は体下部に強い段(くびれ)があり、深い碗状をしている(24)。器面調整はヘラミガキ・ヨコナデ・刷毛目・ヘラナデで、外面はヘラミガキを多用している。壺は単純口縁である(26・28)が、28は整った縁帯状をしている。26は広口で器面調整に刷毛目・ナデを多用し甕に近い。25も同様なものと推定される。28の器面調整はヘラミガキ・ヨコナデ・刷毛目であるが、口縁部内外面・胴部外面にヘラミガキを多用し、丁寧に仕上げられている。29も同様な壺の胴部と推定される。胴中央下部の膨らむ滑らかな球形で、外面はヘラミガキされている。

以上の他に今泉城跡第19号土壇・遠見塚古墳第12トレンチ自然溝斜面上部第Ⅰ土器群、今熊野遺跡鴻ノ巣第15号住居跡からまとまった資料が出土している。今熊野遺跡例については既に述べたのでここでは触れない。

今泉城跡第19号土壇からは高坏・器台・壺・甕が出土している(第52図)。全体の器形が判明するものは器台(15)・壺(16・17)・台付甕(22)である。器台は鼓形のものであるが、器面調整はナデで粗雑な作りである。16の壺は口縁部の大きく外反する有段口縁で、胴部は膨らみをもつ滑らかな球形である。外面は刷毛目の後ヘラミガキで仕上げられている。17は直立気味に外傾する



第53図 清水遺跡出土土器

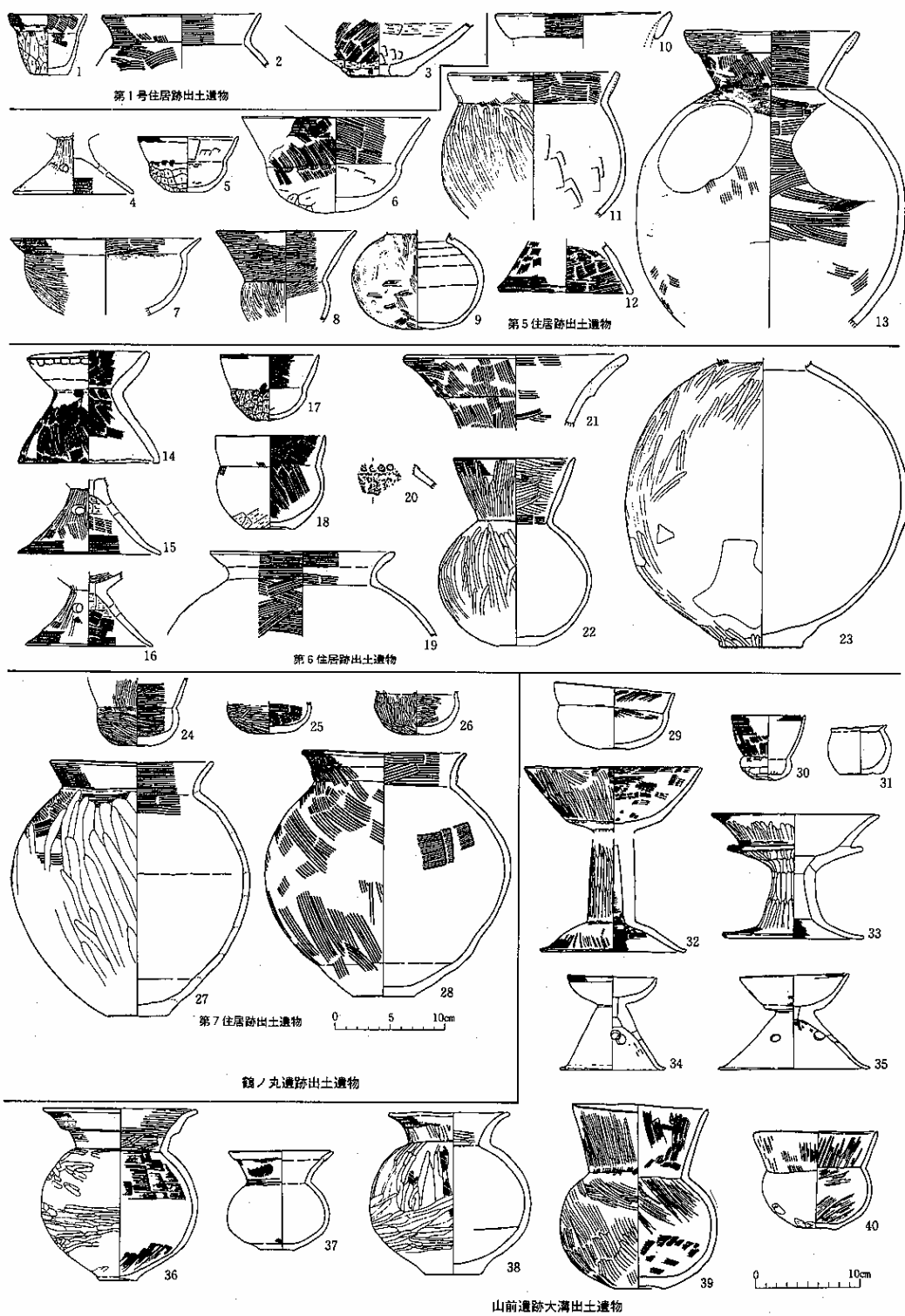
単純口縁の壺で、胴部は球形に近い玉葱状である。外面はヘラミガキ・刷毛目・ヘラケズリで、胴下部に稜がある。台付甕は広口で胴下半部が外傾している。胴部外面は刷毛目である。この他破片であるが、「棒状工具の腹縁の押圧による波状口縁」の甕がある(20)。

遠見塚古墳第12トレンチで検出された自然溝斜面上部からは壺4点・甕40点・台付甕2点・高坏6点・坏3点が一括して出土したことが報じられている。図示されたのは坏・壺・甕8点であるが(第52図)、今後この時期の一括資料として基準になりうるものである。坏は体部に段(くびれ)をもち下部がすぼまるもの(25・26)と、口縁部が外傾し胴部が膨らみながらすぼまるもの(27)がある。26はくびれが強い。いずれも磨滅しているが27の外面にヘラミガキの痕跡がある。壺は有段口縁(32)と単純口縁(31)のものがある。有段口縁の壺は口縁部が肥厚し垂直に立ち上り、胴部は下膨らみの球形である。外面の器面調整はヘラミガキで、頸部が刷毛目となっている。単純口縁の壺は口縁部が短かく外傾し、胴部は球形の玉葱状をしている。外面は刷毛目後ヘラミガキである。甕はいずれも口縁部の外反するもので、胴部は滑らかな球形をしている。胴部外面の器面調整は刷毛目が多用される。

以上、第ⅡA段階に位置づけられる資料を紹介した。器種構成は特殊なものを除けば第Ⅰ段階と同じで、それは第Ⅲ段階まで継承される。しかし、各器種ごとに若干の相違がある。すなわち、高坏は坏部が丸底のものより無段平底のものが多くなる。高坏・器台の脚部は裾の大きく広がるものがほぼ姿を消し、円窓も3孔のものが一般的となる。器面調整は丁寧であるが、第Ⅰ段階のものにはおよばない。坏は粗製化が目立ちはじめ、器面調整もヘラミガキの他に刷毛目やナデに留まるもの、両者の併用されるものが特徴的である。また、外面の段はくびれが強く、接合部分に継ぎ足し痕を残し充分な器面調整が及ばないものもある。複合口縁壺は刻目縦位浮文・刻目凸帯がほぼ失なわれ、簡素ではあるが均整のとれた滑らかな器形となる。また、口縁部幅の狭い複合口縁壺は口縁部が内弯気味外傾から単純に外傾する傾向にある。単純口縁壺も坏同様粗製化が目立ちはじめ、ヘラミガキの他に刷毛目、ヘラケズリが併用され、器形も強く押しつぶされた張りのある玉葱状胴部から張りの弱い幾分膨らんだ玉葱状のものが特徴的となる。口縁部の外反する甕は胴部の張りが失なわれ全体に滑らかな球形胴部となり、胴下部の稜も目立たなくなる。S字状口縁の甕は口縁部の器厚が均質になる。甗は丸底単孔ではあるものの、丸い鉢状になり口縁部の屈曲が弱く僅かに外傾する複合口縁となる。したがって、第ⅡA段階は総じて第Ⅰ段階の器形を継承しながらも全体に簡素化・粗製化が開始されるとみることができる。

第ⅡB段階

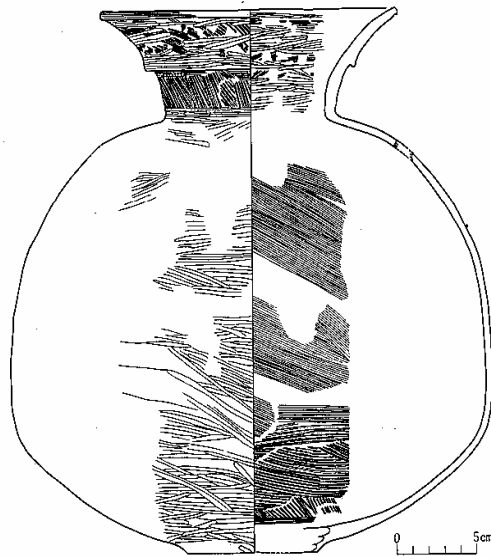
鶴丸遺跡第1・5・6号住居跡出土土器を基準資料とし、その類例として山前遺跡大溝・十三塚遺跡尾根第2号住居跡・宮前遺跡第22号住居跡出土土器をあげることができる。



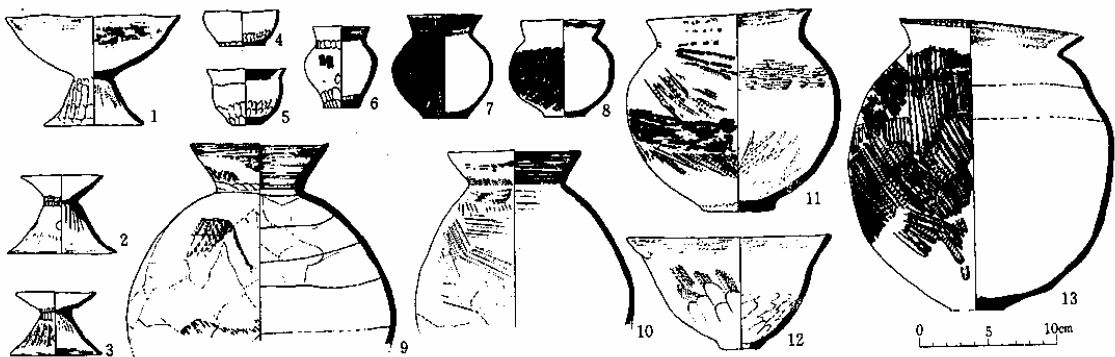
第54図 鶴ノ丸遺跡・山前遺跡出土土器

鶴ノ丸遺跡：第1・5・6・7号住居跡から高坏・器台・坏・壺・甕・甔が出土している(第54図)。

高坏は脚部で円錐台状に開き、中央部に3孔の円窓がある。外面の器面調整はヘラミガキである(4)。器台は脚部で円錐台状に開くもの(15・16)と鼓形14のものがある。前者は受け部を欠いているが脚上部に3孔の円窓があり、受け部との間に貫通孔がある。外面は刷毛目後ヘラミガキで仕上げられ、裾はヨコナデされている。後者は全体に肉厚で、器面調整は口縁部が指頭によるオサエ、外面がナデである。坏は体部中央に段(くびれ)がつき、下部がすぼまるもの(5・6・8・17・24)と広口の鉢状のもの(7)・小鉢状のもの(1・18)がある。前者には内・外面がヘラミガキで仕上げられるもの(8・24)とヘラケズリや刷毛目で口縁部だけヨコナデされるもの(5・6・17)がある。広口鉢状のものは口縁部が強く外傾し、胴部内外面がヘラミガキされている。小鉢状のものはヘラケズリ・刷毛目・ナデなどで粗い仕上げである。壺は複合口縁(10・13・21)と単純口縁(22)のものがある。10・13は口縁部幅が狭い複合口縁壺で、10は口縁部が外傾し、13は僅かに外傾している。13の胴部は長胴気味の球形である。23もこの種の壺に伴う胴部と推定される。外面の調整はヘラミガキ・刷毛目が併用されている。22は口縁部が直立気味に外傾して開く単純口縁壺で、胴部は張りのない膨らんだ玉葱状をしている。外面はヘラミガキで仕上げられている。9も同種の壺と推定される。甕は広口で胴中央下部が膨らむもの(11)と口縁部が外反し長胴気味の球形胴部をもつものがある(27・28)。外面の器面



第55図 多賀城市新田遺跡第60号土坑出土土器
(多賀城市教委原図一部訂正)



第56図 十三塚遺跡尾根第2号住居跡出土土器

調整は刷毛目・軽いヘラミガキが併用されている。12は台付甕である。甕は単孔平底(丸底風)鉢状のものである(3)。外面調整は刷毛目・ヘラケズリである。

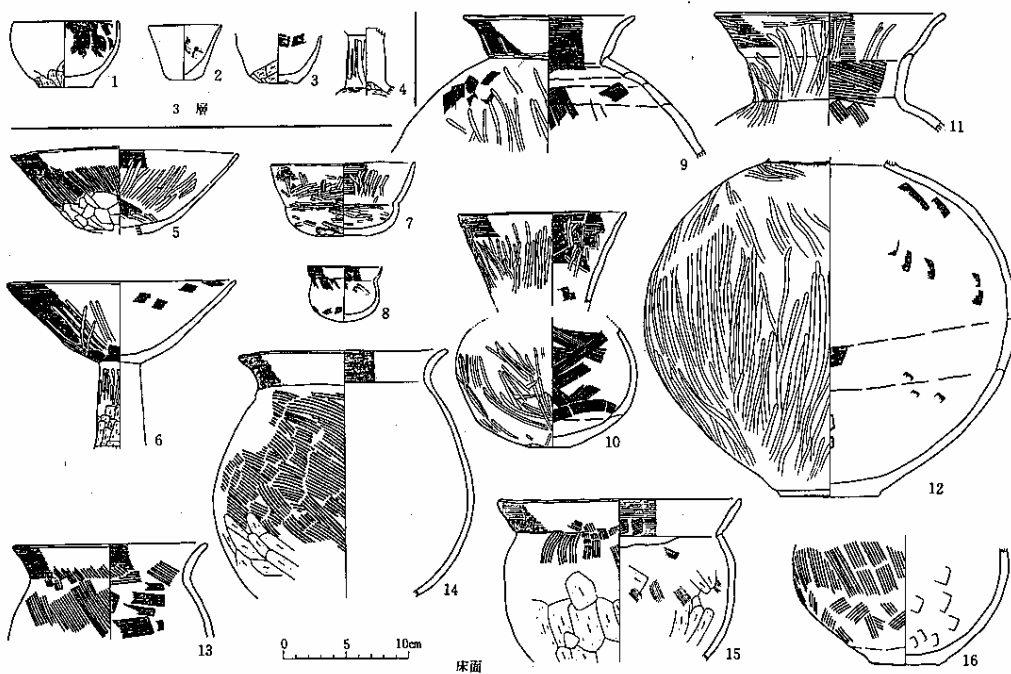
山前遺跡では大溝底面付近からまとまって土師器群が出土しており、高坏・器台・坏・壺12点が図示されている(第54図)。高坏は無段平底の坏部と円筒状脚部からなる(32)。脚下部は扁平で膨らみの強い円錐台状をしている。外面はヘラミガキされている。器台は坏をのせた形状のもの(33)と受け部のままのもの(34・35)がある。前者の脚部は下方に開いた円筒状で裾が広がり、受け部との間は筒状になっている。後者の脚部は円錐台状で中央部に円窓があり、受け部との間に貫通孔がある。坏は体下部にくびれをもつもの(30)と広口鉢状のもの(29)がある。器面調整はヘラミガキ・ヨコナデ・刷毛目などである。壺は複合口縁(36・37)と単純口縁のもの(38~40)がある。複合口縁壺の胴部は球形もしくはつぶれた球形をしている。外面の器面調整はヘラミガキおよび刷毛目である。単純口縁壺には口縁部が外反するもの(38)・直立気味に外傾するもの(39)・広口のもの(40)がある。胴部はつぶれた球形が張りを持った玉葱状で、外面はヘラミガキ・刷毛目・ヘラケズリ等で仕上げられている。

十三塚遺跡尾根第2号住居跡からは高坏・器台・壺・甕・甗などが出土している(第56図)。高坏は無段丸底で、脚部は円錐台状をしている(1)。器台は碗・皿状の受け部と円錐台状の脚部からなり、脚中央部3~4孔の円窓がある。受け部との間には貫通孔がある(2・3)。壺は口縁部の外傾する単純口縁で、胴部は下膨らみの球形で、長胴気味である(9・10)。甕は口縁部が外反し、胴部が滑らかな球形のもの(11)と外反する刻目口縁で、胴部が長胴気味球形のもの(13)がある。甗は単孔平底で、丸味をもつ鉢状のものである(12)。資料は実見したが、細かな器形の特徴・器面調整については十分な観察をなし得ていない。

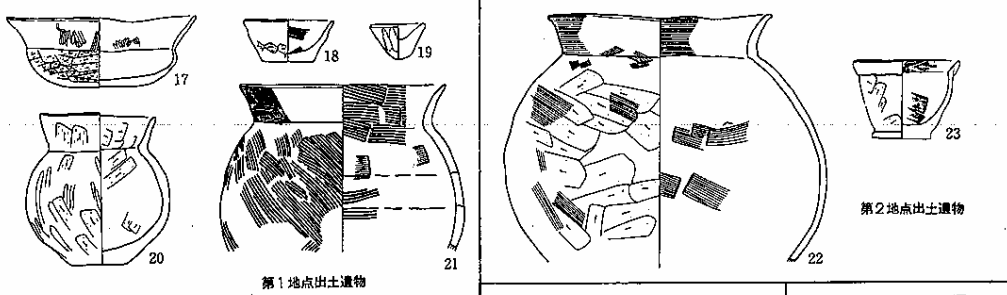
宮前遺跡第22号住居跡からは高坏・坏・甕が出土している(第51図)。高坏は脚上半部で、上部が柱実、下部が円錐台状をなすと推定され、円窓がある。外面はヘラミガキされている(26)。坏は体下部でくびれるもので、丹塗りされている(25)。甕は口縁部が外反し、胴部が長胴気味の球形をしている(27)。内・外面とも刷毛目調整である。

以上、第ⅡB段階の資料を紹介した。この段階の特徴については、第Ⅱ段階の冒頭で述べた通りである。資料的に補足すると、鶴ノ丸遺跡の複合口縁壺21は胴部を欠いている。類似した口縁部形態をもつ壺は多賀城市新田遺跡第60号土壇からも発見され、口縁部径もほぼ等しい。

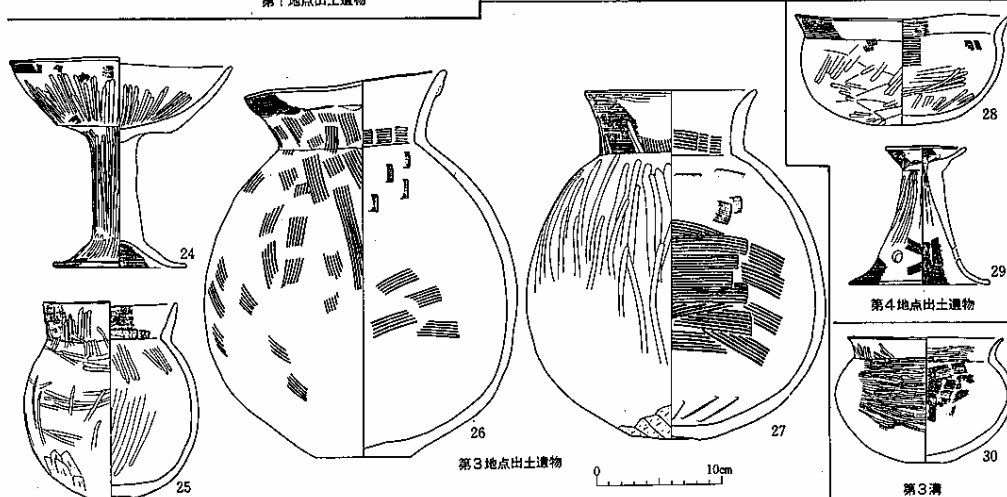
新田遺跡の壺は下膨みで、長胴気味球形の胴部をしており、外面はヘラミガキされている。また、同遺跡ではS K52土壇からこの段階の高坏・壺・甗などがまとまって出土している(多賀城市教委:1983.10)。



第1住居跡出土遺物



第1地点出土遺物



第3地点出土遺物

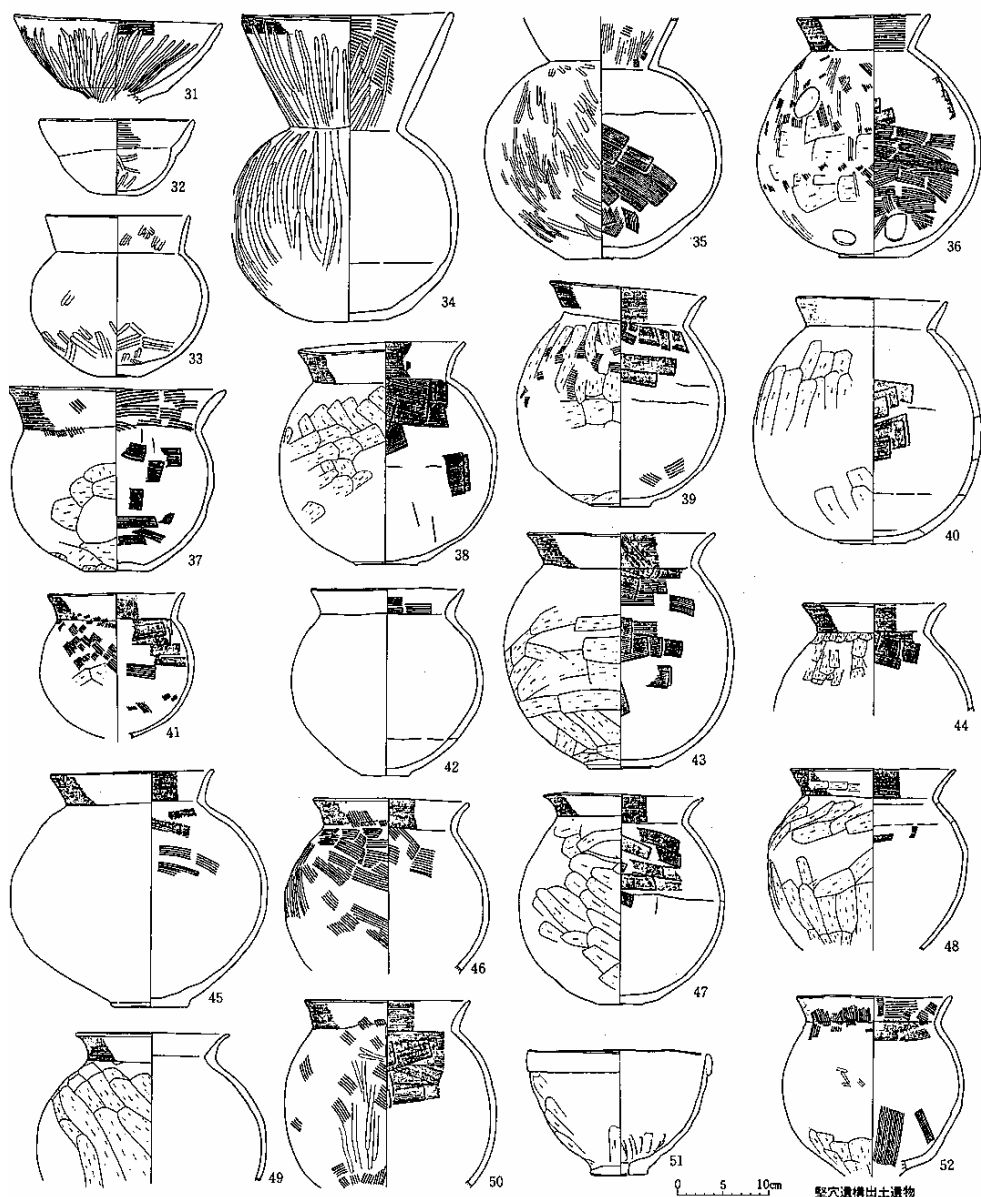
第3溝

第57図 留沼遺跡・第1・2次調査区出土土器Ⅰ

第II段階

留沼遺跡第1・2次調査区出土土器を基準資料とし、その類例として西野田遺跡・清水遺跡第10号溝・遺物包含層第III層・宮前遺跡第2号住居跡出土土器をあげることができる。

留沼遺跡：第1号住居跡・第1～4遺物集中地点・竪穴遺構・第4層上面からまとめて遺物が出土している。これらの土器は第1号住居跡の遺物を媒介として検討すると大部分のもの



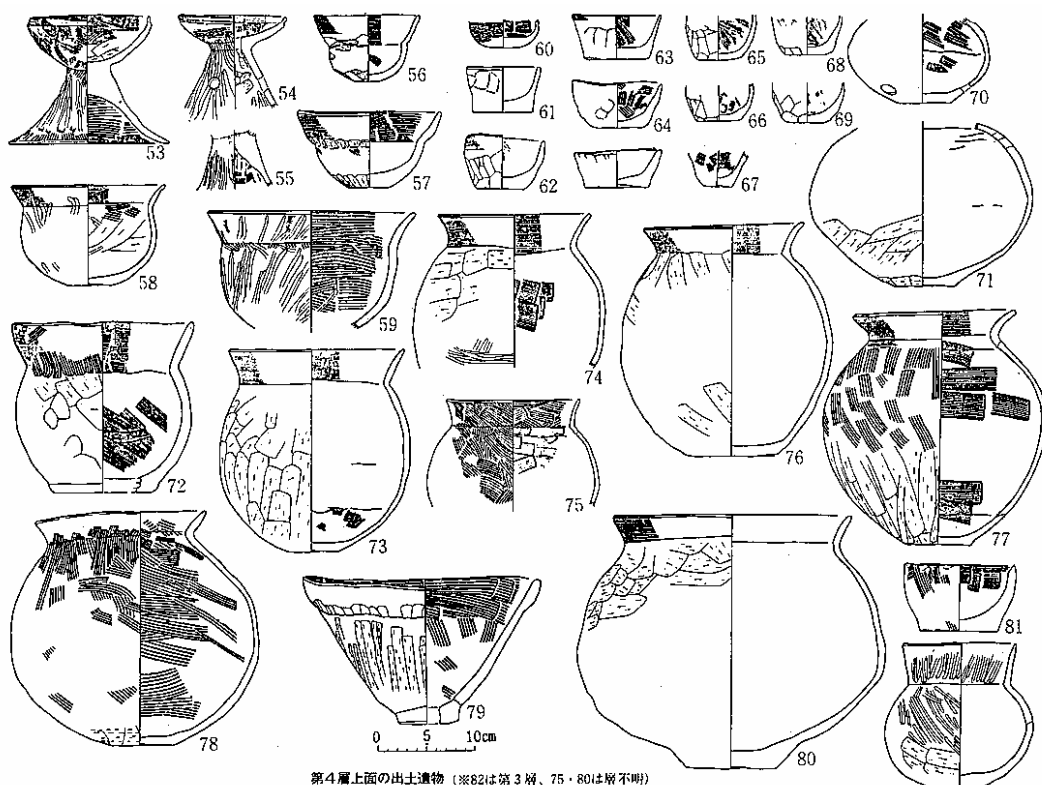
第58図 留沼遺跡・第1・2次調査区出土土器Ⅱ

に共伴関係が指摘でき、共伴関係の不明な一部のものについても「各器種の器形・調整などの諸特徴をみると、ある限定された時期の所産である可能性が強く感じられる。」と述べられている(手塚均：1980.3)。また、これらの遺構・遺物が第1・2溝の北側に限定されて発見されていることも興味深く、そこから出土する土器に第ⅡB段階にさかのぼるもの、南小泉式土器に降ることが明らかなものは含まれていない。したがって、第1・2次調査で出土した土器をすべて第Ⅲ段階に位置するものとして一括しておきたい。

留沼遺跡出土土器には高坏・器台・坏・壺・甕・甑がある(第57～59図)。高坏は無段丸底(5・6)と無段平底(24)のものがあり、後者は比較的底径が大きい。脚部は柱実で下部が扁平な円錐台状に開く(24)。器面調整はヘラミガキ・ヨコナデ・刷毛目・ヘラケズリなどが併用される。

器台は碗・皿状の受け部と円錐台状の脚部からなる(29・53・54)。碗状受け部は口縁部に軽い段をもつ(53・54)。29・54は脚部に3孔の円窓をもち、受け部との間に貫通孔があるが、53では両者を欠く。外面の器面調整はヘラミガキ・ナデ・刷毛目などが併用され、受け部内面はナデを主体とし、ヘラケズリのものもある(53)。

坏は体部中央に段(くびれ)をもつもの(17・32・56・57)、口縁部が外傾する広口鉢状のもの(28)・小鉢状のもの(23)・無段平底のもの(7・1・18)などがある。7・17は薄手に仕上げられて

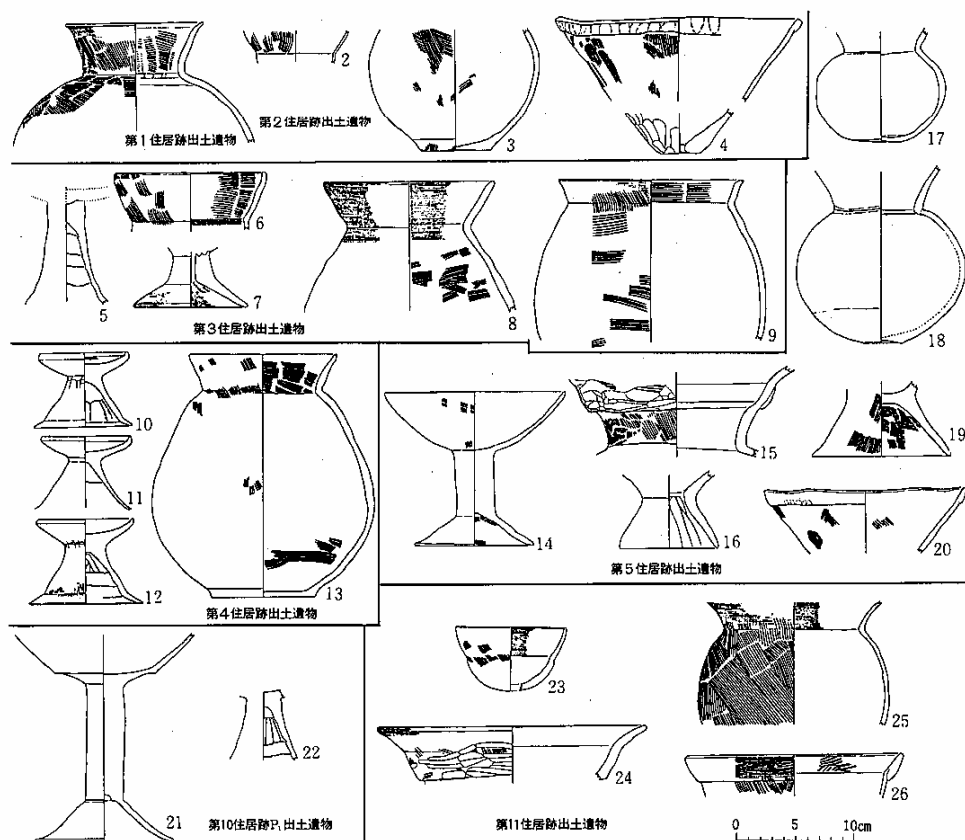


第59図 留沼遺跡・第1・2次調査区出土土器Ⅲ

いるが、厚手で粗雑な作りのものが目立つ。器面調整はヘラミガキの他にナデ・刷毛目・ヘラケズリが多用される。

壺は複合口縁状のもの(11・26)と単純口縁のもの(9・10・20・25・27・33～35)がある。11は有段口縁状に口縁部が屈曲し外反する。26は口縁部に粘土紐を貼り付け肥厚させている。口縁・頸部内面は連続的で外反気味に外傾する。26の胴部は下膨らみで、長胴気味の球形である。単純口縁の壺には口縁部が大きく外反するもの(9)、頸部が直立し口縁部が小さく外反するもの(27)、口縁部が直立気味に外傾するもの(10・34・35)・短頸壺状のもの(20・25・33)・広口壺状のもの(30)がある。胴部は25が長胴気味の球形、27が下膨らみで長胴気味の球形、10・34・35はやや押しつぶされた球形である。12は有段口縁壺もしくは口縁部が大きく外反する大形壺の胴部と推定されるもので、胴中央部が膨む長胴気味の球形をしている。これらの壺の外表面調整はヘラミガキ・刷毛目・ナデであるが、ヘラミガキはあまり丁寧でない。

甕はいずれも口縁部が外傾もしくは外反し、球形の胴部をもつものであるが(14・21・22・38～50・73～80)、一部に広口のもの(37・58・59・72)、台付と推定されるもの(52)がある。球



第60図 西野田遺跡出土土器

形胴部は、大部分のものが長胴気味で全体に丸味をもっている(21・38～43・46～50・73～77)が、一部に胴中央部の膨らむもの(22・45・78)、下膨らみのもの(14・36)もある。外面の器面調整は刷毛目とヘラケズリであるが、後者が多用される。この点は広口甕・台付甕も同様である。ただ、広口甕の場合はヘラミガキも併用される(58・59)。

甗は単孔・平底の鉢状のもので複合口縁である(51・79)。胴部は内弯するもの(51)と直線的に外傾するもの(79)があるが、口縁部への移行は連続的である。外面の器面調整はヘラケズリである。

西野田遺跡第1～5・10・11号住居跡からは高坏・器台・坏・壺・甕が出土している(第60図)。高坏は坏部が丸底状のもの(14)と平底状のもの(21)がある。両者とも脚部は中実の円柱状で、下部が偏平な円錐台状に開く。この他、脚部全体が円錐台状に開くものもあり、内面に粘土紐積み上げ痕を残している(5・22)。器台は脚部が円錐台状のもの(10～12)、脚上部が短い円柱状でその下が円錐台状に開くもの(7)、鼓形のもの(16)がある。前者は受部口縁が立ち上がり、貫通孔や円窓をもたず、脚部内面にナデツケや粘土紐積み上げ痕を残している。16の鼓形器台も粗雑な作りである。坏は体部中央に段(くびれ)をもち薄手に仕上げられているもの(2・6)と厚手のもの(23)がある。壺は有段口縁(15・24)と単純口縁のもの(1・17・18)がある。単純口縁のものは口縁部が大きく外反するもの(1)と口縁部が直立気味に外傾して開くもの(17・18)がある。後者の胴部はつぶれた球形をしている。甕は口縁部が外傾し、下膨らみで長胴気味のものである(8・9・13)。台付甕も1点ある(19)。甗は単孔平底で、底部から口縁部に直線的に開く(4・20)。口縁部は複合口縁である。これらの土器は磨滅しているものが多い。しかし、器面調整の全体的特徴として、外面に刷毛目を多用していることがうかがえる(8の外面は軽いヘラミガキ)。

清水遺跡遺物包含層第Ⅲ層・第10号溝からは、高坏・壺・甕が出土している(第53図)。遺物包含層第Ⅲ層の下層である第Ⅳ層からは第ⅡA段階の土器が出土しており、土器群の変遷が層位的に確かめられている。

高坏の坏部は無段平底のもの(1・2)で、底径は1が小さく2が大きい。脚部は円錐台状に開くもの(1・2・3・16)と上部が円筒状になるもの(7)、柱実の円柱状になるもの(4～6・8・15)がある。脚裾部の開き方には滑らかに開くもの(15)、僅かに屈曲して開くもの(1～3)、段を形成して開くもの(16)など多様である。器面調整は外面がヘラミガキ・ナデ・刷毛目で、脚部内面はヘラケズリを加えているものが多い。壺は有段口縁状のもの(9)と単純口縁で大形のもの(10・17・20)・小形のもの(11)がある。17の口縁部には縦位浮文状の丸味をもった隆帯が1本ある。20の胴部は胴上部に張りをもつ長胴気味の球形である。18も大形壺の胴部と推定され、長胴気味の球形である。甕はいずれも口縁部が外反するものである(12～14)。これらの壺

・甕の外面調整は刷毛目とヘラミガキが併用され、ヘラミガキは壺に、刷毛目は甕に多用される。

宮前遺跡第2号住居跡からは高坏・坏・壺・甕・甗が出土している(第50図)。高坏は坏部が無段平底で、底径が小さいもの(1)と大きいもの(2)がある。2の脚部は柱実の円柱状である。外面はヘラミガキされている。坏は厚手のもので、体下部に段(くびれ)がある。体下部はヘラケズリされている(3)。壺は複合口縁で、口縁・頸部内面が連続的で外傾する(5)。外面調整は刷毛目である。16~20は各種壺の胴下部と推定される。甕には口縁部が外反もしくは外傾するもの(6~13)と直立気味に外傾する広口のもの(14)、S字状口縁のもの(15)がある。前者の胴部はほぼ球形のもの(6)と下膨らみで長胴気味球形と推定されるもの(7・12・13)がある。広口甕の胴部は肩が張っている(14)。これらの甕の外面調整は刷毛目・ヘラナデ・軽いヘラミガキが併用される。S字状口縁甕は口縁部の厚さが均質である。胴部は肩の張らないもので、外面の刷毛目は縦に長いが、1単位ごとに間隔があいている。甗は単孔平底の鉢状で、底部から口縁部に直線的に開く(24)。口縁部は複合口縁である。

以上、第Ⅲ段階に位置づけられる資料を紹介した。その基本的特徴は高坏・器台・坏・壺・甕・甗からなる器種構成をもつという点で、第Ⅰ・Ⅱ段階と共通する。しかし、それぞれの器種を見ていくと塩釜式土器の最終段階であることを示している。すなわち、高坏・器台の脚部から円窓の消失が本格化し、器台における受け部・脚部間の貫通孔が失なわれたものが出現することである。もちろん、第Ⅰ段階においても受け部・脚部間に貫通孔のないものもある。しかし、それは受け部が極端に小さい場合に限られ、第Ⅲ段階の貫通孔の消失は一定の普遍性に近いものであり、それはとりもなおさず器台そのものの消失過程を示している。そのことは、塩釜式土器を特徴づける複合口縁・有段口縁壺においても同様に、口縁部の複合・有段は立体性を失ない微弱なものが多く、第Ⅰ・Ⅱ段階における球形胴部もこの段階では長胴化の傾向が著しくなる。また、器面調整の点から見ると、高坏や器台・坏などの精製器種についても粗略化が著しく、丁寧なヘラミガキはみられなくなる。それに代って刷毛目やヘラケズリ仕上げのものが特徴的となる。甕の場合は、第Ⅰ・Ⅱ段階で主体的に採用されていた刷毛目が減少し、ヘラケズリ・ヘラナデ・軽いヘラミガキに器面調整が転化する。

このような特徴は別な面から見れば塩釜式土器の第Ⅲ段階が南小泉式土器の直前に位置づけられることを示している。すなわち、南小泉式土器の古い段階に位置づけられる多賀城市山王遺跡第13号遺構(高倉敏明:1981.3 丹羽茂:1983.3)と比較すると興味深い。器台・埴状坏・台付甕が消失し、高坏・坏・壺・甕からなる南小泉式的器種組成を示し、坏が無段丸底・平底のものに転化しているものの、高坏・壺・甕などの器種に塩釜式土器第Ⅲ段階からの連続性を認めることができる。器形的には近似し、相違点として高坏における無段平底坏部の底径の

増大、脚裾部の屈曲が著しくなること、脚部内面調整がナデツケやヘラナデに変化すること、壺・甕においては長胴化が一層促進されることをあげ得る程度である。

器種の変遷

塩釜式土器第Ⅰ～Ⅲ段階の基準資料を紹介し、その特徴を説明した。その結果をまとめて示したのが第61図である。ここでは各器種ごとにその変遷を整理しておきたい。

高坏：坏部は丸底のものと平底のものが一貫して存在するが、古い段階に丸底、新しい段階に平底のものが盛行する傾向がある。そして、有段丸底のものは第Ⅰ段階に多く、第ⅡB段階以降はみられない。

脚部は円錐台状のもの、上部が円柱状で中・下部が円錐台状のもの、上・中部が円筒状で下部が円錐台状のもの、上・中部が円柱状で下部が円錐台状のものがある。脚部全体が円錐台状のものは、一貫して認められるが、第Ⅰ段階では脚裾部が大きく広がるものが特徴的に存在し(15・16)、第Ⅱ段階以降はほとんどみられない。また、脚上部が円柱状で中・下部が円錐台状のものは各段階にみられるが、第ⅡA段階にもっとも特徴的に存在する(13・14)。脚上・中部が円柱状のものは第Ⅲ段階に特徴的に存在する(7・8)。脚上・中部が円筒状のものは山前遺跡に1例あるだけなので判断に困難を伴うが(10)、外観は脚上・中部円柱状のものと共通していることから、新しい段階に特徴的なものの一部とも考えられる。また、各種の脚部形態(前記四種)は系譜上の問題で、それぞれが変遷している可能性が強く、それは上述のように円錐台状脚部のものについて変遷を指摘できるが、その他のものについては資料が不充分である。

脚部の円窓は第Ⅰ段階では3～9孔、しかも径の大きなもの、多段のものが存在する(15・16・18)。それに対し、第Ⅱ段階以降は一段に限定され、径も小形化し、数もほぼ3孔となり、第Ⅲ段階では無窓のものが多くなる(1～4・7・8)。

外面および坏部内面の器面調整は、第Ⅰ・ⅡA段階では丁寧なヘラミガキを主体とするが、第ⅡB段階以降はナデや刷毛目を併用するものが多くなり、第Ⅲ段階ではヘラケズリ仕上げのものも一部にみられるようになる。

器台：脚部が円錐台状で受け部が小皿・碗状のもの、坏をのせた状態のもの、脚上部が円柱状で中・下部が円錐台状のもの、鼓形のものなどがある。鼓形のは資料が少なく変遷を指摘できないが、他のものについては可能である。時期的変遷を明瞭に示すのは受け部・脚部間の貫通孔と円窓である。貫通孔径は第Ⅰ段階程大きく(34)、第Ⅱ段階以降小形化し(27～29)、第Ⅲ段階では失なわれるものが一定の普遍性をもって出現する(21・23)。円窓は高坏脚部の場合と同様な傾向を示す。

外面および坏部内面の器面調整は、第Ⅰ段階では丁寧なヘラミガキであるのに対し、第Ⅱ段階以降刷毛目やヘラナデが出現し、第Ⅲ段階では受け部内面をヘラミガキするものは少なくな

る。

坏：体部中央もしくは下部に段（くびれ）をもつ圜状のものと、壙・鉢・小鉢状のものがある。第Ⅰ段階の圜状坏には一部に平底で粗雑なものもあるが(55・56)、丸底のものはいずれも丁寧なヘラミガキで仕上げられている(52～54)。また、口径に対して器高も大きく、全体に深目である。口縁部に段がみられ、体部中央の段をあわせると二段になるものもある(52)。これに対し、第ⅡA段階以降は口径に対し器高の低い偏平気味のものが特徴的に現われる(39・40・49)。また、段の位置が体下部のものも多く認められる。

第ⅡA段階では段の上に積み上げられる粘土紐の下端が器面調整を受けずに外面に残されているものが特徴的に存在する(48・50)。また、器面調整としてヘラミガキの他に刷毛目・ナデが併用されるようになる。第ⅡB段階になると下半部のヘラケズリ仕上げが加わり、第Ⅲ段階では刷毛目・ヘラケズリが主要なものとなり、ヘラミガキも軽いものへと変化する。このように圜状坏は高坏・器台と同様に精製とも言える仕上げの丁寧なものから粗略なものへの変化が指摘できる。

壙・鉢・小鉢状のものは第Ⅰ段階から刷毛目・ナデ・ヘラケズリ調整を採用し、第Ⅲ段階まで変化が乏しい(57～79)。しかし、口縁部を複合状に肥厚させるのは第Ⅰ段階の特徴であり(70・71)、全体的にみれば第Ⅰ段階から第Ⅲ段階へ粗雑化の傾向が看取される。

壺：複合・有段口縁壺は、第Ⅰ段階では頸部に刻目凸帯、口縁部に刻目縦位浮文のみられるものがある(92)。複合口縁壺は、頸部上端に稜を形成するか屈曲しながら、口縁部が内弯気味に外傾する(94)。第ⅡA段階では口縁部が頸部上端で稜を形成し、そのまま外傾する(89)。第ⅡB段階では外傾の程度が弱くなり、頸部上端の稜も弱くなる(87)。第Ⅲ段階では頸部から口縁部まで直線的もしくは滑らかに移行する(83・84)。

有段口縁壺の段は、第ⅡA段階で最も顕著で(88・90)、第ⅡB段階以降は弱くなる。複合・有段口縁壺の胴部は第ⅡA段階で整った球形(90)、下膨らみ球形のもの(88)が存在するが、第ⅡB段階以降長胴気味になり(87)、第Ⅲ段階では長胴化が促進される(84)。

複合・有段口縁壺の外面調整は、ヘラミガキ・刷毛目が多用されるが、次第に刷毛目の比重が高まり、ヘラミガキも丁寧なものから軽いものに変化する。

単純口縁壺には口縁部が外反する球形胴部を基調とするもの(大・中形:95～102)と、口縁部が直立気味か直線的に外傾して開く玉葱状胴部を基調とするもの(中・小形:103～107・111・112・114～116・119～122)、広口壺(中・小形:108～110・113・117・118)などがある。前者の器形・器面調整は複合・有段口縁壺と同様な道を歩む。玉葱状胴部をもつものは全体に変化が乏しい。しかし、第Ⅰ段階のものは頸部で強くすぼまり、肩と同時に全体に張りがある(119・122)。抽象的表現ではあるが緊張感にあふれた力強さをもっている。器面調整も丁寧なヘラ

ミガキである。それに対し、第Ⅱ段階以降は肩および全体の張りを失ない力強さに欠け、器面調整のヘラミガキも軽いものになり粗略化する。広口壺は変遷を知る上で資料が充分でない。

■：口縁部が外反する平底甕を主体として(124～128・131・133～136)、広口(129・130・132・138・139)・S字状口縁(140・143・148・149)・波状口縁(147)・台付甕がある。口縁部が外反する甕には胴部が強く膨らむもの(A)・胴下部に強い張りをもつ球形のもの(B)・滑らかな球形のもの(C)・長胴気味球形のもの(D)・長胴化した球形のもの(E)などがある。第Ⅰ段階にはA(136)・B(135)があり、Bが特徴的存在である。Aは第Ⅱ段階では不明であるが、第Ⅲ段階にもみられる(126)ことから変遷しながら継続すると考えられる。第Ⅰ段階のA・Bは口縁部が肥厚するものが多く、力強く屈曲しながら端部に至るのに対し、第Ⅲ段階では単純に外反する。また、第Ⅰ段階の胴部外面は刷毛目であるのに対し、第Ⅲ段階のAはヘラケズリになっている。Cは第ⅡA段階の特徴で主体的に存在する(133)。この種の甕も一部第Ⅲ段階まで継承されるが(124)、器面調整が刷毛目からヘラナデに変化している。Dは第ⅡB段階に特徴的に存在し(131)、球形胴部の長胴化の開始を示す。そして、この段階まで胴部外面調整は刷毛目を主体としている。Eは長胴化が促進されたもので、第Ⅲ段階の特徴である(127・128)。Eには胴部全体が丸味をもって長胴化したものと(127)、下膨らみのものがある(128)。前者の胴部外面調整はヘラケズリを主体とし、刷毛目も併用される。後者では刷毛目・ヘラナデ・軽いミガキが併用される。

広口甕は資料的に少ないが、口縁部が外反するもの(129・132・138)・直立気味のもの(130・139)があり、器面調整において、前述した一般の甕と同様な変遷を原則的にたどるものと推定される。

S字状口縁甕は、第Ⅰ段階のものは口縁下部が肥厚する(148・149)のに対し、第Ⅱ・Ⅲ段階では均質な器厚でS字状になる(140・143)。また、少ない資料ではあるが、第Ⅱ段階のものは肩が張る(143)のに対し、第Ⅰ・Ⅲ段階のものは肩が張らない(140・149)。肩部の器面調整は第Ⅰ段階がヘラケズリ、第Ⅱ段階が密接した縦に長い刷毛目、第Ⅲ段階が単位ごとに間隔をおいた縦に長い刷毛目である。

波状口縁甕は第ⅡA段階のものが今熊野遺跡(147)に、刻目口縁のものが今泉城跡にある。その他、山前遺跡住居跡・六反田遺跡(田中則和他:1981.12)からも出土しているが、いずれも古い段階に伴うものである。ただ、刻目口縁の残存形態を示すものが十三塚遺跡にもあるので、第ⅡB段階まで残る可能性が高い。

台付甕は第Ⅰ～Ⅲ段階まで存在するが、どの種の甕と組みあうか明確ではない。

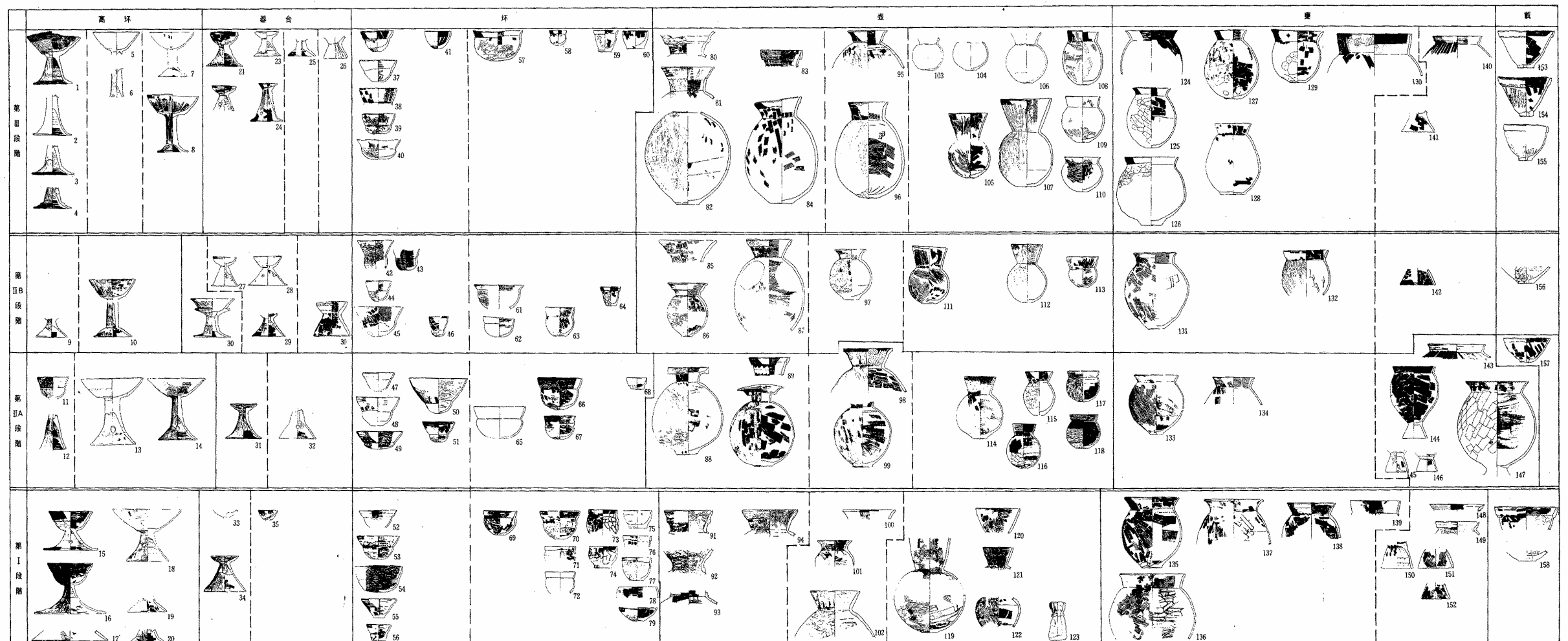
■：いずれも単孔のもので、複合口縁の鉢状をしている(153～158)。底部は第Ⅰ・Ⅱ段階が丸底、第ⅡB・Ⅲ段階が平底である。胴部は第Ⅰ・Ⅱ段階が内湾、第Ⅲ段階が内湾と直線的

外傾のものが併存し、後者が多い。口縁部は第Ⅰ段階のものが内弯気味に外傾(158)、第ⅡA段階のもの(157)が僅かに外傾し、第Ⅲ段階のものが胴部から直線的(153・154)もしくは滑らかに(155)移行する。外面の調整は、第Ⅰ・Ⅱ段階では刷毛目であるのに対し、第Ⅲ段階ではヘラケズリのものも出現する。

塩釜式土器における地域性

塩釜式土器は宮城県内の資料を見る限り、際立った地域性はみられない。それは地域性を見る上で資料が十分にそろっていないということもあるかもしれない。その意味では第Ⅲ段階が最も資料が豊富なので、その点を検討してみたい。高坏・器台・坏・壺については相違を指摘することが困難である。しかし、甕については器形・器面調整に若干の相違を見い出すことができる。すなわち、宮城県中・南部に位置する西野田遺跡・宮前遺跡と宮城県北部の留沼遺跡について甕を比較すると、胴部が長胴化した球形という点では共通するものの(時期的共通性)、西野田・宮前遺跡では下膨らみのものが多く、胴部外面器面調整として刷毛目・ヘラナデ・軽いヘラミガキが併用される。それに対し、留沼遺跡では胴部全体に丸味をもったものが多く、下膨らみのものは少ない。胴部外面の器面調整もヘラケズリを主体とし刷毛目を併用するという特徴をもっている。このように、塩釜式土器には際立った地域性はみられないものの、第Ⅲ段階の甕については器形細部・器面調整などに細かな地域的相違を指摘できる。この点を隣接する山形県の状況と簡単に比較してみたい。西村山郡下楨遺跡では第1・4・5・7・9・10号住居跡から高坏・器台・坏・壺・甕・甗がまとまって出土しており、各器種の特徴は第Ⅲ段階に併行することを示している。その中で、甕をみると口縁部が直立もしくは外傾する広口のものが多く、この種の甕は宮城県でも出土するが量的に少なく客体的存在で、地域性を示すものと考えられる。

このような地域性が第Ⅲ段階に至って形成されたのか、それとも第Ⅰ段階から継承されたのか、さらにはもっと大きな地域的系譜に基づくものなのかは、まだ検討できる資料が充分でない。また、甕の中で、波状口縁甕・S字状口縁甕は前者が関東地方、後者が東海地方および群馬県地方からの外来的要素の強いものと一般的に理解されているが、東北地方における土師器の成立過程そのものが未解明の今、積極的に検討できる段階にはない。もちろん、今態野遺跡の波状口縁甕や宮前遺跡のS字状口縁甕を見ると、在地的もしくは在地化した器種と較べ相対的ではあるが、胎土・器形・器面調整・全体的印象として違和感を感じる。しかし、それは第Ⅰ～Ⅲ段階の時期差を越えるものではなく、S字状口縁甕にあってはその変遷を示し得る範囲のものである。外来系土器および要素については弥生時代終末もしくはそれらに接続する第Ⅰ段階以前の資料が明らかになった段階で検討を加えたい。



第61図 塩釜式土器の変遷

周溝墓と集落

今熊野遺跡の方形周溝墓群と集落

方形周溝墓の特徴

今熊野遺跡からは既に述べたように、発掘調査によって10基の方形周溝墓が発見され、そのうち2基(第1・4号方形周溝墓)を完掘した。その他、部分的調査(調査区内もしくは削平され一部残存)を実施したのが6基、確認のみのもの2基である。これらの方形周溝墓の特徴を整理すると次のようになる。

○分布:北台台地では台地中央部の東緩斜面から、台地北端で平坦面が狭まる部分まで分布する。また、その分布は北台台地の南北両側に谷の入った部分を経て鴻ノ巣台地に至り、鴻ノ巣台地が東側へ広がり始める部分まで続く。

○形状:基本的には方形を基調とするが、長方形に近いものもある。また、周溝は各辺の中央部外縁が膨らみをもち、深さを増す場合が多く、その傾向は大規模なもの程著しい。また、第1号方形周溝墓は三隅に陸橋部をもっている。

○規模:長軸が7mから24mまでのものがあり、10m前後(7～15m)のものが多い。その中で、特に大きいのは第1号方形周溝墓(24×21.4m)と第10号方形周溝墓(20×20m)である。

○方向:北隅と南隅を結んだ方向がほぼ真北のもの(第1・2・4～8号周溝墓)、長軸方向がほぼ真北のもの(第10・11号周溝墓)、任意方向のもの(第9号周溝墓)がある。

○埋葬施設・盛土:いずれも明確に残っていたものはない。第4号方形周溝墓から土壇1基が検出されたが、位置的に偏りがある。

○遺物:いずれも転落した状態で、周溝の堆積土から発見された。遺物が出土したのは第1号方形周溝墓(土師器壺14個体。そのうち図化できたのは7個体。)・第4号方形周溝墓(土師器杯・壺各1個体)・第6号方形周溝墓(土師器壺1個体)・第11号方形周溝墓(土師器壺1個体)である。

以上が、今熊野遺跡の方形周溝墓の特徴である。分布範囲は上述の通りで、北台台地の南側および鴻ノ巣台地中央部以東の平坦面および南緩斜面には及ばない。それでも部分的な調査で10基検出され、分布範囲の面積を考慮すれば20基前後の群集形態をとるものと推定される。

方形周溝墓群の時期——土器経年との関係——

方形周溝墓群の時期についてその出土土器から検討してみたい。第1号方形周溝墓から出土した土器で器形の判明するのは図示した有段口縁壺6点と単純口縁壺1点である(第9～11図)。有段口縁壺はいずれも焼成前底部穿孔で、仮器化したものである。したがって、日常生活に用いられる壺に較べ部分的な誇張が存在する可能性はある。しかし、底部穿孔土器は土師器に包

括されるものであり、基本的には共通する时期的特徴を示すと考えられる。6点の有段口縁壺は口径・胴径・器高などに接近した数値を示し、大きさの点で共通している。また、最大径は口縁部にあり、胴径よりも僅かに大きい。口縁部は明瞭な有段口縁で、口縁部が大きく外反する。胴部はほぼ球形である。このような特徴をもった壺は第ⅡA段階の遠見塚古墳自然溝斜面上部第Ⅰ土器群の壺、今泉城跡第19号土壇の壺にみいだすことができる。また、明瞭な有段口縁、胴部球形は第ⅡA段階の特徴であり、第ⅡB段階以降は長胴気味球形胴部へと変化していく。したがって、第1号方形周溝墓の有段口縁壺は第ⅡA段階に位置づけられる。しかし、胴部の特徴をよく見ると、遠見塚・今泉城例などと比べ胴径に対する胴高の割合が僅かに大きい。この点を重視すれば、第ⅡA段階でも第ⅡB段階に接近した時期とみることができる。また、口縁部が直立気味に外傾する単純口縁壺も胴部の特徴でみると、第ⅡA段階の今泉城跡や色麻古墳群第11号住居跡出土壺と、第ⅡB段階の鶴ノ丸遺跡第6号住居跡出土壺との中間的様相を示している。したがって、仮器としての底部穿孔有段口縁壺と日常器である単純口縁壺の編年観は矛盾せず、第1号方形周溝墓の時期も第ⅡA段階の中で、より第ⅡB段階に接近した頃に求めることができる。

第4号方形周溝墓からは口縁部を欠く壺と坏が出土している(第17図)。この壺は胴部中央が膨らむ球形で、第ⅡB段階以降にはみられないものである。また、器面調整があまり丁寧でないことから第Ⅰ段階に遡るものでもない。したがって、消極的ではあるが第ⅡA段階頃のものと考えられる。坏は口縁部が内弯気味に外傾し、底部が凹み底になるもので、第Ⅰ段階の宮前遺跡第53号住居跡出土坏とも似るが、口縁部が単純化している。その点からすれば、壺と同様第ⅡA段階に位置づけられる。第4号方形周溝墓も第ⅡA段階のものと考えられる。

第6号方形周溝から出土している小形広口壺(状の坏)その帰属が難しい(第17図)。口縁部の肥厚した特徴からすれば第ⅡA段階を中心としたその前後の時期とみることができ、第6号方形周溝墓の時期もその頃に求められる。

第11号方形周溝墓から確認調査で出土した壺は焼成後の底部穿孔で、口縁部を欠いている。胴部の特徴は第ⅡA段階の今泉城跡第19号土壇・色麻古墳群第11号住居跡出土壺と近似し、第ⅡB段階までは降らない。したがって第11号方形周溝墓とともに第ⅡA段階に位置づけられよう。

以上のように、土器を出土している4基の方形周溝墓は若干の時間的幅はあるかもしれないが、いずれも第ⅡA段階を中心とした時期に位置づけられる。これらの方形周溝墓群は第1号方形周溝墓が南端、第4・6号方形周溝墓が中央、第11号方形周溝墓が東端に位置し、相互に離れているにもかかわらず、ほぼ共通した時期のものである。このことは今熊野遺跡の方形周溝墓群が第ⅡA段階を中心として築造された可能性を示している。そして、土器が残っていな

かったものも含めて、今熊野遺跡の方形周溝墓群は、塩釜式土器第ⅡA段階を中心とする限られた時期に連続的に営まれた群集墓と理解することができる。

その中で、第1号方形周溝墓は際立った規模をもっている。また、この第1号方形周溝墓は三隅に陸橋部をもつという他の方形周溝墓にはみられない構造をもち、仮器化された有段口縁の焼成前底部穿孔壺が多量に供献されるという特徴をもっている。有段口縁壺の焼成前底部穿孔は日常器から独立したもので、葬送儀礼に伴ない墓に供献されることを目的とした仮器の成立という点で歴史的意味がある。そして、今熊野遺跡方形周溝墓群は限られた時期に連続的に営まれたもので、方形周溝墓という共通した墓制をもつものの、規模・構造・供献土器などに相違がみられ、その中に階層差の存在を認めることが可能である。

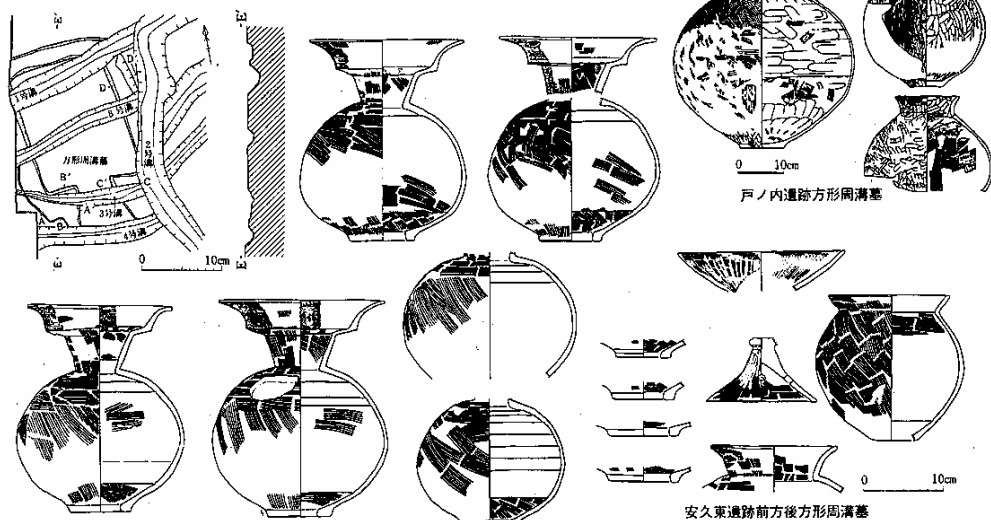
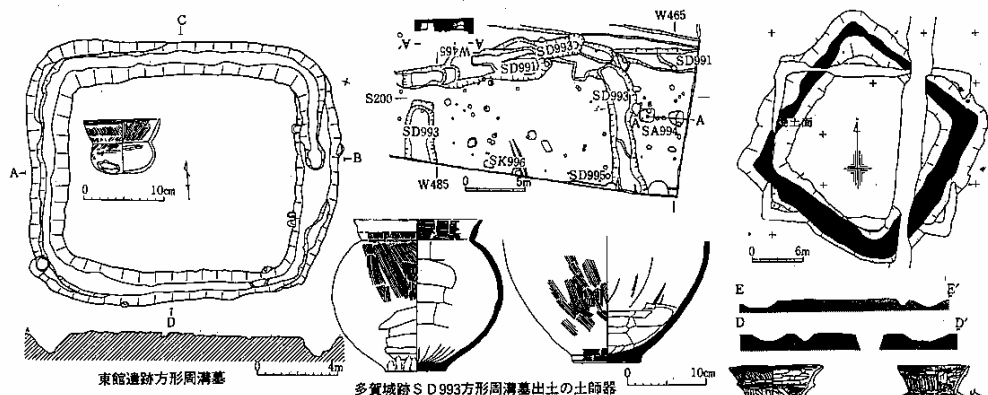
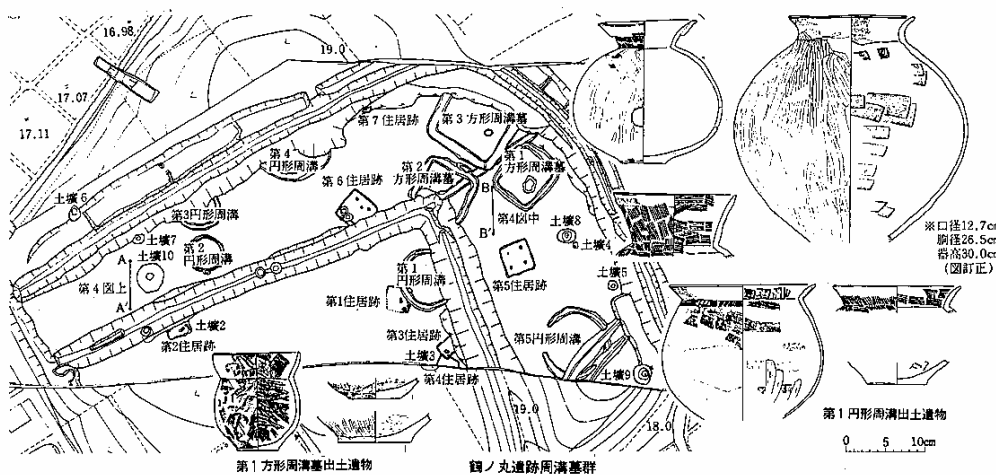
集落との関係

古墳時代前期(塩釜式期)の住居跡は鴻ノ巣台地に存在し、方形周溝墓群の密集する北台台地にはみられない。すなわち、発掘調査を行なった住居跡で、塩釜式期のものは鴻ノ巣台地南緩斜面に位置する第15・21・46号住居跡である。第15号住居跡出土土器は既に述べたように第ⅡA段階のものである。そして、第21号住居跡の複合・有段口縁壺も第ⅡA段階に位置づけられる。第46号住居跡の坏は第ⅡA段階か第Ⅰ段階に遡る要素をもつものである。確認調査で出土したCA-39号住居跡・地点不明の壺・坏は第ⅡA段階か第Ⅰ段階に遡るものである。この他、第52・54号住居跡は土器こそ出土しなかったが、地床炉をもつもので、塩釜式期の可能性が高い。また、鴻ノ巣台地で発掘調査を実施した住居跡は南緩斜面の一部に過ぎず、この他に広い中央部平坦面で数多くの住居跡を確認している。これら時期未確認住居跡の中に塩釜式期のものがかなり含まれていると考えられ、方形周溝墓群に併行する集落が鴻ノ巣台地に広く展開していた可能性が強い。

したがって、今熊野遺跡では鴻ノ巣台地に古墳時代前期(第ⅡA段階中心)の集落が営まれ、集落よりも一段高い北台台地を主体として群集墓としての性格をもつ方形周溝墓群が築造されたものと考えることができる。もちろん、方形周溝墓群の基盤となったのは鴻ノ巣台地の集落に限定されるものではなく南台台地を含めた複数の集落に基づくものと思われる。

宮城県内の周溝墓と集落

今熊野遺跡の方形周溝墓は宮城県さらには東北地方において最初の発見であった。その後、宮城県内で各種の周溝墓の発見があいついでいる。すなわち、仙台市安久東遺跡の前方後方形周溝墓(土岐山武:1980.9)、同市戸ノ内遺跡の方形周溝墓(仙台市教委:1983.12 早坂・渡部:1985.1)、多賀城市多賀城跡五万崎地区の方形周溝墓(宮多研:1978.3)、栗原郡高清水町東館遺跡の方形周溝墓(加藤道男:1980.3)、同郡志波姫町鶴ノ丸遺跡の方形周溝墓・円形周溝墓(手塚均:1981.9)などがある。また、遺物の出土はないが、集落跡との関係から塩釜式期の円形周



第62図 宮城県内の周溝墓とその出土土器

溝墓・方形周溝墓と推定されるものが名取市西野田遺跡(丹羽・柳田・阿部:1974.3)・栗原郡志波姫町宇南遺跡(斎藤吉弘:1979.3)から発見されている。各遺跡の周溝墓とその出土土器は第62図に示した。

第Ⅰ段階：塩釜式土器第Ⅰ段階の周溝墓としては、戸ノ内遺跡(1基)をあげることができる。戸ノ内遺跡の方形周溝墓は長・短軸約24mという大規模なものであるが、溝の深さは均一で、陸橋部を形成していない。周溝内からは複合口縁壺・単純口縁壺・高坏などが出土し、さらには周溝壁に正位の状態で埋納された有段口縁壺が発見されている。また、方形周溝墓に隣接して、北側および東側から4軒の住居跡が発見されている。調査範囲が限られているため方形周溝墓が群集するものか否か明らかでない。

第ⅡA段階：塩釜式土器第ⅡA段階のものとしては、安久東遺跡の前方後方形周溝墓(1基)と多賀城跡五万崎地区の方形周溝墓(1基)をあげることができる。安久東遺跡の前方後方形周溝墓は前方部前端が後世の溝によって切られているために正確な規模は明確でないが、主軸長24.5～26.0m、後方部幅18mと大規模なものである。周溝は後方部で幅2～3mと共通しているが、くびれ部で広くなり、前方部では前端に向かって狭くなる。深さは一様ではないが、後方部で深く、前方部で浅くなる。遺物としては、後方部および前方部(くびれ部)縁辺におかれたものが周溝内に落ち込んだ状態で、有段口縁壺・高坏・甕が出土している(14個体図示)。この中で主体を占めるのは焼成前底部穿孔の有段口縁壺で、10個体図示されている。この種の壺が多量に供献されたものと思われる。底部穿孔壺および日常器としての高坏・甕は第ⅡA段階の特徴を示すものである。また、底部穿孔壺を今熊野遺跡第1号方形周溝墓のものと比較すると、口縁部の大きく開く有段口縁であること、胴部がほぼ球形であること、底部が焼成前穿孔であるという点で共通している。しかし、その特徴をさらに検討すると、今熊野例は最大径が口縁部にあり、胴径より僅かに大きいのに対し、安久東例は口縁部径が胴径より僅かに小さい。胴部は胴径と胴高の比が今熊野例では1:0.86～0.95で0.92前後のものが多いのに対し、安久東例では1:0.85～0.87で0.85前後のものが多い。この比率は安久東例が今泉城跡・遠見塚古墳・色麻古墳群例に近い値であるのに対し、今熊野例が僅かに胴高の占る比率が高いことを示している。また、底部孔を比較すると今熊野例は穿孔ケズリの他に仕上げケズリを一部もしくは全体に施したものがみられ、底部孔外縁が内傾するものもあるのに対し、安久東例は仕上げケズリが顕著なものはみられない。以上の相違は同じ第ⅡA段階でも安久東例が今熊野例よりも先行する可能性を示している。

前方後方形周溝墓は西側が未調査なので、群集するか否かは不明である。なお、東側約75mの所から周溝墓に併行する時期の住居跡が2軒発見されている(岩渕・田中:1976.3)。

多賀城跡五万崎地区からは方形周溝墓の北側半分(S D993)が検出されている。北辺が19.5m

と規模の大きいもので、北西隅と北東隅が陸橋状をしている。周溝下層から甕や壺が多量に発見されたとし、甕2点が図示されている。胴部球形と長胴化した甕である。前者は第ⅡA段階の特徴を示すものであるが、後者は新しい要素をもつものである^(注)。また、SD993方形周溝墓の東側に隣接してSD975とされる「C」状の溝が検出されている。幅2m・西辺の長さ約15mで、東側は調査区外にのびている。形状は方形周溝墓と何ら変りはないが、須恵器や瓦が出土したことから除外されたものと思われる。しかし、周溝が埋まりきらないまま新しい遺物が捨てられたとも考えられる。SD-975が方形周溝墓とすれば、調査区の東側に向かって方形周溝墓が群集して存在する可能性は多分にある。

第ⅡB段階：塩釜式土器第ⅡB段階のものとしては、鶴ノ丸遺跡の方形・円形周溝墓群(合計8基)・東館遺跡の方形周溝墓(1基)をあげることができる。

鶴ノ丸遺跡の方形周溝墓3基・円形周溝墓5基と住居跡5軒が一見混在する形で発見されている。5軒の住居跡はいずれも第ⅡB段階のものである。周溝墓で遺物が出土しているのは、第1・3方形周溝墓・第1円形周溝墓で、いずれも住居跡同様第ⅡB段階のものである。したがって遺物の出土しなかったものも含め、鶴ノ丸遺跡の周溝墓群は第ⅡB段階を中心として築かれたものと推定される。また、第1円形周溝墓は同じ第ⅡB段階の第1住居跡を切っていることから、周溝墓群と住居跡群はそれぞれ限定された時期幅の中で占地を変えたものと思われる。両者の分布をみると台地縁辺に周溝墓が多く、その内側に住居跡群が立地し、その接点で両者が重複している。したがって、住居と周溝墓が混在しているとみるよりは、両者が極めて近接して営まれたと考えるのが妥当であろう。

また、円形・方形周溝墓の規模をみると、長軸もしくは直径が6.65~14.5mで、10m前後のものが多い。第3方形周溝墓は14.5m、第4円形周溝墓は12m(推定)、第5円形周溝墓は12.2mとやや大きい。今熊野遺跡の第1号方形周溝墓のように際立った相違を示すものではない。そして、これらの周溝墓群からは仮器化した焼成前底部穿孔壺は発見されず、いずれも日常器そのものか、焼成後に胴部に穿孔したものが出土している。したがって、鶴ノ丸遺跡の周溝墓群は占地・規模・供献土器からみて、階層差の少ない集団(首長層)の群集墓とみることができる。

東館遺跡では長軸15.4m・短軸13.2mの方形周溝墓が1基検出され、焼成後体部穿孔の埴状坏が1点出土している。周溝は埋まる過程で、土器の捨て場として利用され、上部から南小泉式土器が出土している。埴状坏は第6層から出土し、堆積土上部の南小泉式土器とは層位的に区別される。埴状坏は薄手で、ヘラミガキによって仕上げられたもので、内部から穿孔されている。発掘調査で検出された方形周溝墓は1基だけであるが、発掘区が丘陵平坦面の東南端に限定されているため、単独で存在するのか、それとも群集するのか必ずしも明らかでない。

その他の周溝墓：以上の他に、遺物は出土していないが、隣接する集落との関係から周溝墓と推定されるものに、名取市西野田遺跡の円形周溝墓（2基）と栗原郡志波姫町宇南遺跡の方形周溝墓（1基）がある。西野田遺跡の円形周溝墓は第1号が直径17.5m、第2号が直径14.5mで、第Ⅲ段階の集落に隣接して南緩斜面に営まれている。地形形状の制約からこれ以上は群集しない可能性が強い。

宇南遺跡の方形周溝墓は長・短軸とも10mの規模をもち、陸橋部は形成していない。方形周溝墓から約100m離れて第Ⅱ段階の遺物を出土する住居跡が3軒発見されている。トレンチ調査を主体としていること、さらには調査対象面積が限られていることから、方形周溝墓が群集するか否か明確でない。

また、名取市五郎市遺跡では1984年度の調査で、円形・方形周溝墓群が発見された。恵美昌之氏の教示によると、方形周溝墓と推定されるもの6基、円形周溝墓と推定されるもの2基が群集する形で確認されたという。本格的な調査は1985年度に継続して行なわれるというので、その成果に期待したい。

周溝墓の性格

宮城県内で今まで発見された周溝墓は上述の通りである。その特徴は次のように整理することができる。すなわち、第1点として周溝墓は群集する傾向が強いということである。すなわち、調査範囲が限られているため群集するか否か不明なものを除くと西野田遺跡の2基を最少として鶴ノ丸遺跡の8基以上、今熊野遺跡の20基前後（確認された10基から推定）、五郎市遺跡の8基以上などをあげることができる。そして、これらの周溝墓は短い時期幅の中で、連続して営まれるという群集墓としての性格をもっている。第2に、これらの周溝墓は程度の差こそあれ、その時期の集落と隣接して営まれていることをあげることができる。すなわち、戸ノ内遺跡・今熊野遺跡・西野田遺跡・鶴ノ丸遺跡は近接し、その中で鶴ノ丸遺跡では部分的に占地が重複している。戸ノ内遺跡・今熊野遺跡・西野田遺跡は近接しているものの、周溝墓と集落の場所は区別され、それは今熊野遺跡において地形的にも明瞭である。やや離れて隣接しているものとしては安久東遺跡・宇南遺跡などをあげることができる。そして、これらの周溝墓群は隣接する単一もしくは複数（少数）の集落を基盤としているものと思われる。第3に、周溝墓は10～15m前後の規模をもつものが多いのに対し、今熊野遺跡第1号方形周溝墓（24m）、安久東遺跡前方後方形周溝墓（24.5～26.0m）のように25m前後の際立った規模をもつものが存在する。これらは、陸橋部を持ったり、前方後方形を示す周溝墓で、多量の焼成前底部穿孔土器（仮器）が日常器とともに供献されている。これらの際立った周溝墓は10～15m前後の規模で日常器の供献される一般的な周溝墓と、周溝墓という枠組みの中で差違がみられ、それらは被葬者あるいは造営者の階層の差違に基づくものと考えられる。

古墳と周溝墓

周溝墓の性格は前述の通りであるが、その中には日常器の供献される一般的規模のものと、仮器である焼成前底部穿孔壺が多量に供献される際立った規模の周溝墓が存在することを指摘した。前者は弥生時代以来の伝統的な周溝墓の性格を継承したものとも言え、それは塩釜式土器の第ⅡB・Ⅲ段階まで続いていることが確認された。また、後者は周溝墓の枠の中にありながら、一般的な周溝墓から際立った姿を示している。その歴史的意味をさらに明確にするために、周溝墓より遅れて、しかしまた併行して造営された古墳との関係を検討してみたい。

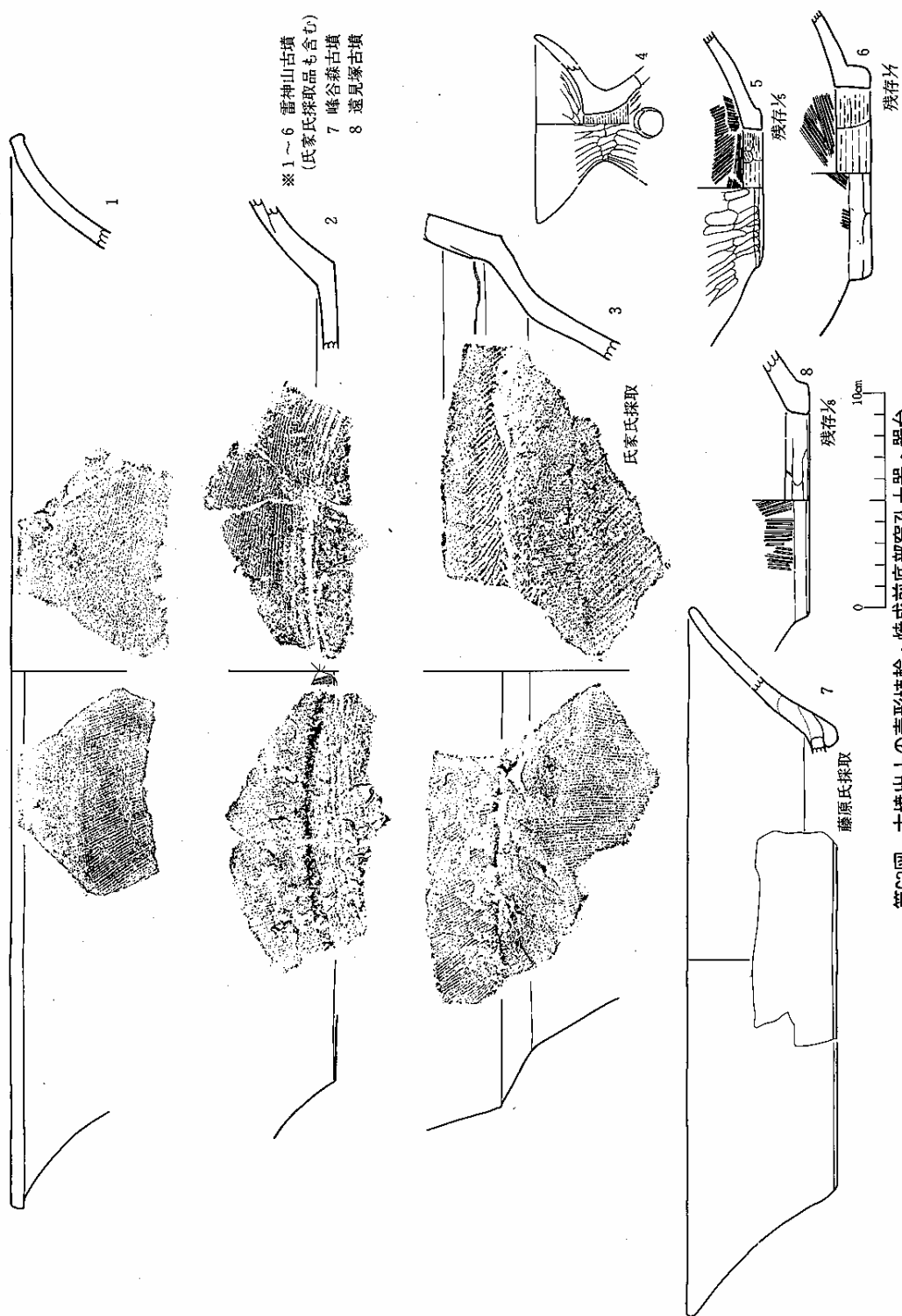
宮城県内の前期古墳

宮城県内の古墳で塩釜式土器を出土し、古墳時代前期に位置づけられるものとして、県南部では角田市関ノ内古墳(山田稔他:1978.3)、県中央部では名取市雷神山古墳・同市小塚古墳(恵美昌之:1977.3・1978.3)・同市宇賀崎1号墳(太田・氏家:1980.3)・仙台市遠見塚古墳(岩淵康治他:1976.3 岩淵・田中・結城:1977.3 結城・工藤:1979.3 結城慎一:1980.3 工藤哲司:1981.3 結城・工藤:1983.3)、県北部では古川市青塚古墳(太田昭夫:1981.3)・加美郡宮崎町夷森古墳(太田昭夫:1981.3)・遠田郡小牛田町蜂谷森古墳(本書所収)をあげることができる。

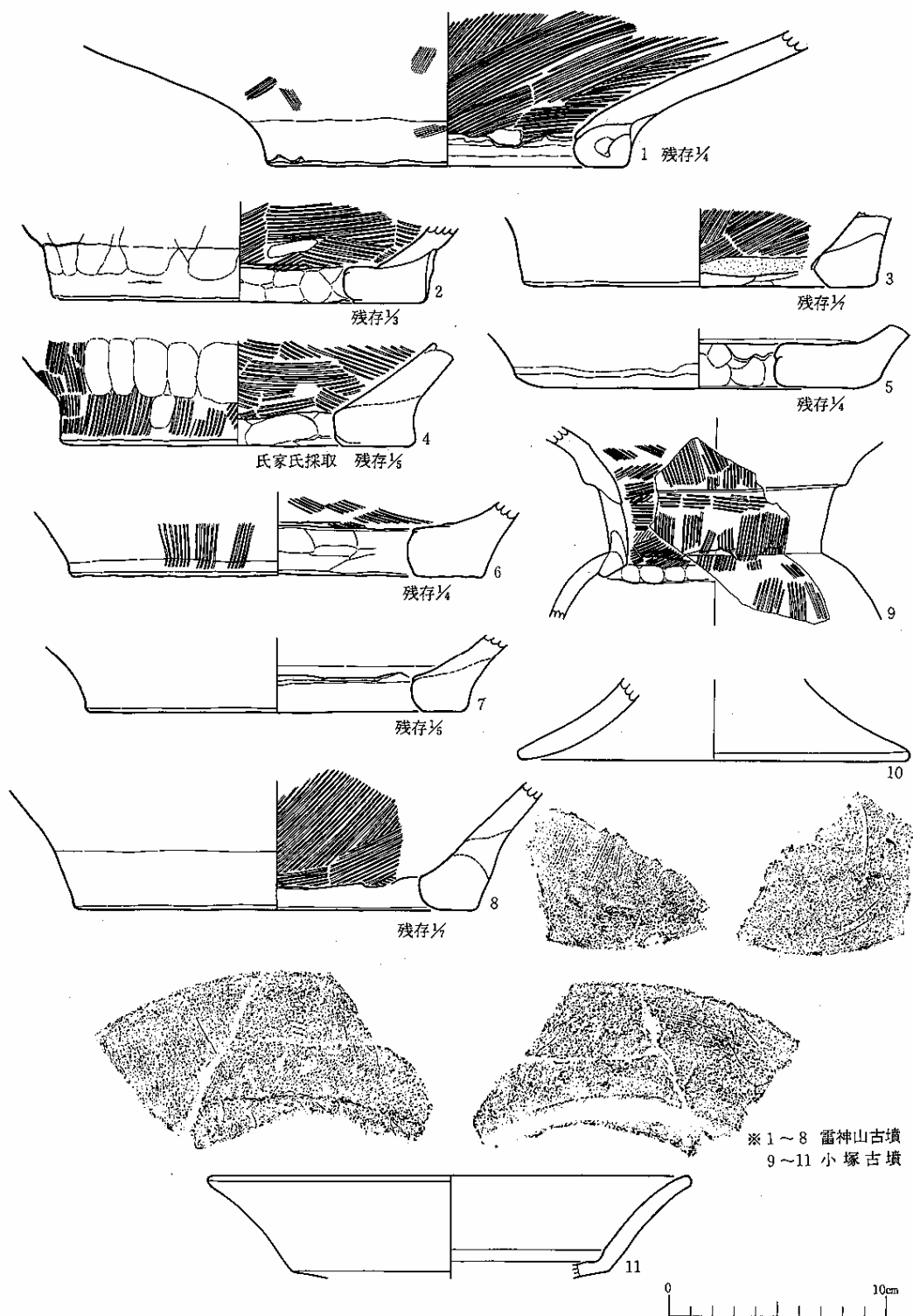
関ノ内古墳:伊具盆地中央に位置する横倉古墳群の1基で、樹枝状丘陵の先端に立地している。墳丘は下部を地山の削り出し、上部を積土によって築いたもので、墳麓に幅1.5~2mの周溝が部分的に途切れながらめぐっている。墳形はやや歪んだ円形で、規模は16.5×15m(墳麓)、高さ約2mである。主体部は船底状墓壇をもつ隅丸長方形の土壇墓(土壇掘り方:長さ3.6m・幅2m)である。墳丘外表から土師器壺2点・「コップ状土器」1点の出土が報じられている(第65図)。土師器壺は単純口縁と複合口縁のもので、前者は西野田遺跡例と共通し、後者は鶴ノ丸例とやや似ているが小破片なので明確でない。ここでは第Ⅲ段階頃のものと考えておきたい。したがって、古墳の時期も第Ⅲ段階頃に求められる。

関ノ内古墳は吉ノ内古墳を主墳とする横倉古墳群の中で、小規模な円墳である。主墳の吉ノ内古墳は全長約66mの前方部が撥状に開く前方後円墳で、古墳群の形成過程を考慮をすると、第Ⅱ段階がそれ以前に遡る可能性を多分に持つものと言える。

宇賀崎1号墳:南部愛島段丘の中央部南端に位置し、舌状に延びた台地の先端に立地している。墳丘は下部を地山の削り出し、上部を積土によって築いたもので、周囲は平坦になっている。墳形は方形で、規模は一辺20m強と推定され、高さは約2.9mである。主体部は粘土床をもつ割竹形木棺と推定され、2基確認されている(土壇掘り方:長さ7.5m・幅2.6m墓壇:長さ6.5m・幅0.8m)。遺物としては主体部の側に埋設された土師器壺、墳丘外表から出土した土師器壺口縁部・底部穿孔土器(壺)などがある。埋設土器(壺)は口縁部を欠くが、胴部球形で今泉城例と共通する。複合口縁壺も口縁部が内面に稜を形成して外傾するもので、宮前遺跡第



第63図 古墳出土の壺形埴輪・焼成前底部穿孔土器・器台



第64図 古墳出土の壺形埴輪・土師器

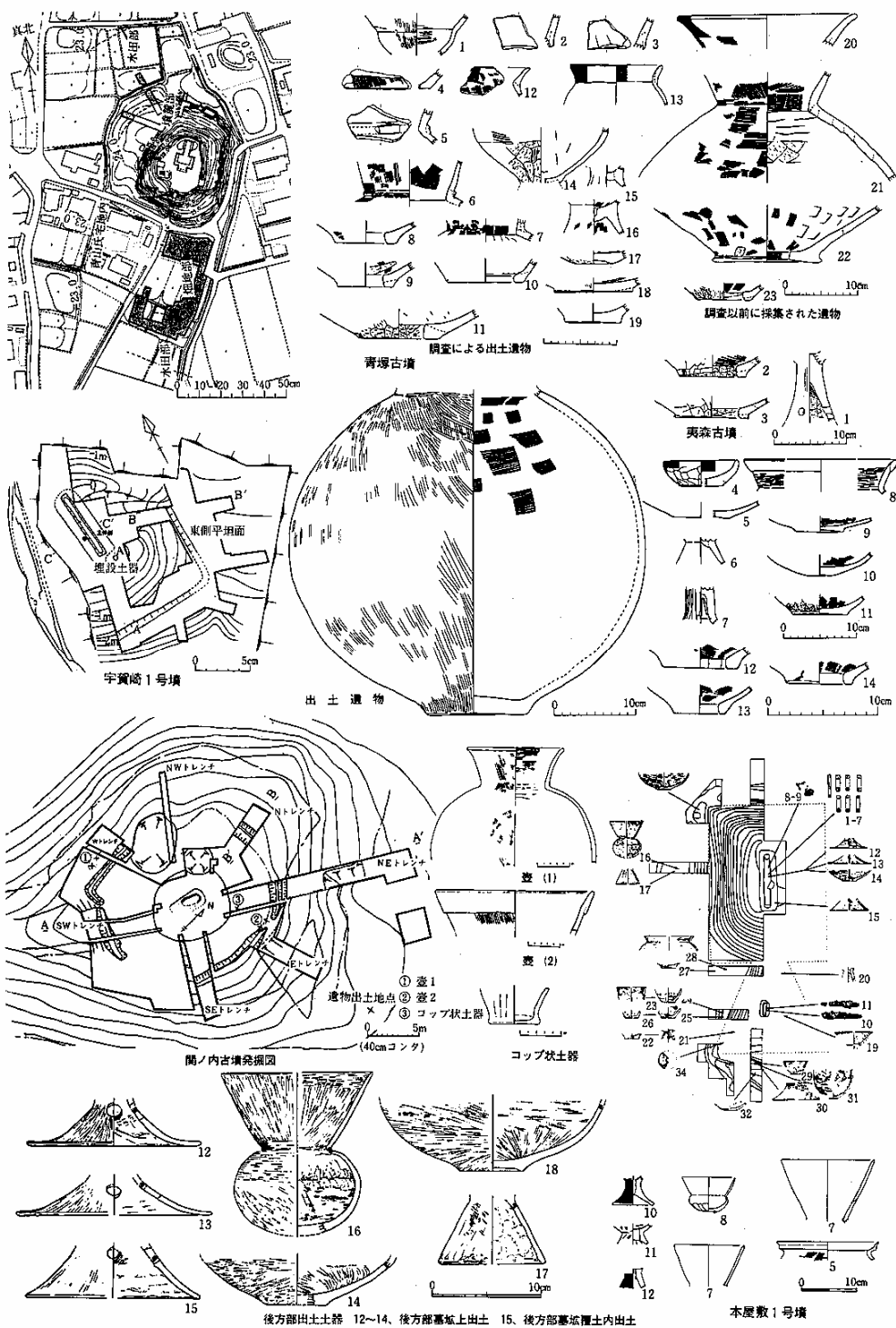
38号住居跡例と共通し、これらは第ⅡA段階に位置づけられる。したがって、宇賀崎1号墳も第ⅡA段階のものと考えられる。

雷神山古墳：南部愛島段丘の東縁に位置し、南北に長い小丘陵の中央部に立地している。全長168m、後円部の高さ12m、前方部の高さ6mの規模をもつ前方後円墳で、下半部を地山の削り出し、上部を積土によって築造し、周囲は平坦面となっている。墳丘外表は後世の畑地・墓地などのため削平が著しいが、保存の良い所では葺き石が残っている。

主体部は未調査のため明らかでないが、外表調査によって土師器器台・焼成前底部穿孔土器(壺)・壺形埴輪が出土している。第63・64図はその中のおもなもので、この他名取市教育委員会によって復元された底部穿孔土器が1個体ある(恵美昌之:1978.3 第10図1)。

器台は受け部上半と脚下半部を欠いているが、受け部は小皿もしくは小碗状、脚部は円錐台状と推定される(4)。受け部と脚部の間には貫通孔があり、脚部円窓も残存部分で確認できる。受け部内・外面と脚部外面はヘラミガキされている。この種の器台は貫通孔・円窓・器面調整などで西野田・留沼遺跡例の第Ⅲ段階まで降るものではなく、第Ⅰ・ⅡA段階の大橋遺跡・宮前遺跡第49号住居跡例程丁寧な作りではない。最も近いものとしては第ⅡB段階の鶴ノ丸遺跡第6号住居跡出土の器台をあげることができる。底部穿孔土器(壺)は底部7～10cmで、底部孔外縁が僅かに外傾し、穿孔ケズリが観察される(第63図5・6)。名取市教育委員会で復元した底部穿孔土器も同様な底部孔をもつもので、胴部は球形であり、第Ⅱ段階に位置づけられる。

出土遺物で主体を占めるのは壺形埴輪である。第63図1～3は口縁部、第64図1～8は基底部である。これらの壺形埴輪は底部穿孔土器と較べると画然とした大きさをもっている。すなわち、今熊野遺跡・安久東遺跡の底部穿孔土器は口径17～27cm・底径6～8cmであるのに対し、雷神山古墳の壺形埴輪は口径約50cm・底径16～18cmで約2倍の大きさを持っている。また、今日まで我々の知っている塩釜式土器の壺でもっとも大きいものとして、宇賀崎1号墳および清水遺跡の例をあげることができる。しかし、宇賀崎1号墳の壺は胴径43cm・底径13cm、清水遺跡の壺は胴径45cm・底径10cmではるかに及ばない。その差は歴然としている。また、底部穿孔土器と壺形埴輪は前者が底部に穿孔しているのに対し、後者は輪状の基底部から作りあげるといふ基本的相違を示している。底部穿孔土器の底部孔については今熊野遺跡第1号方形周溝墓出土例で既に詳述したが、雷神山古墳の壺形埴輪は基底部内側(底部孔外縁)に粘土紐積み上げ痕およびその合わせ目を明瞭に残している。これらの中には、輪状基底部の上に粘土紐を積みあげ、そのまま成形するもの(1)とオサエや何らかの調整を施すもの(2～8)がみられるが、いずれの場合も一部もしくは大部分に成形時の積み上げ、合せ目痕を残しており、輪状基底部から成形していることは明らかである。このためか、基底部内側の断面は全体に丸味をもっており、底部穿孔土器の直線的な底部孔外縁の形状とは相違する。この他、底部穿孔土器との相



第65図 古墳とその出土土器

違点を補足すると、器壁が厚いこと、全体に荒い仕上げであること、器面調整の刷毛目の単位が長いこと、焼成が硬質なことなどをあげることができる。器壁の厚さは基底部において顕著で、2cm前後を測る。底部穿孔土器の場合1.0～1.5cmで1cm前後のことが多い。このことは壺形埴輪が大形であることとともに、輪状基底部から成形するという性格上、基底部を強固にする必要があったことと関連するものと考えられる。荒い仕上げは第63図3に特徴的で、口縁部外面に部分的に粘土を薄く貼り付け、貼り付け痕を残したまま刷毛目を加えていることなどにみられる。また、刷毛目の単位が長いこと、焼成が硬質なことなどは、後出の朝顔形埴輪と共通する要素でもある。

以上のように、雷神山古墳は日常器としての器台、仮器としての底部穿孔土器に加えて、多量の壺形埴輪が供献もしくは樹立されたもので、上述の出土遺物から第ⅡB段階頃のものと推定される。

小塚古墳：雷神山古墳の北東に隣接する直径54mの円墳で、下部を地山削り出し、上部を積土によって築いており、幅5.8～8.8mの周溝がめぐっている。小塚古墳の外表からは、明確な埴輪は出土せず、焼成の点で雷神山古墳の壺形埴輪と似た土師器壺・高坏が出土している(第64図9～11)。9は壺の口縁～肩部で、有段口縁である。この種の有段口縁壺は鶴ノ丸遺跡例に近いが、成形や調整が極めて粗い。すなわち、成形時の積み上げ痕が刷毛目によっても消えず、段に近い形状で残っている。10は高坏の脚部であるが、全体に厚手で、内外とも刷毛目がみられる。高坏脚部外面の刷毛目は一般的なものではなく、第ⅡB段階以降に部分的に採用されるものである。11は有段口縁壺か高坏か明確でない。有段口縁壺であれば、外反が弱いことから第ⅡB段階、高坏であれば坏底部の大きさ、外面刷毛目の特徴から第ⅡB段階以降に位置づけられる。

以上のように、小塚古墳出土土器は第ⅡB段階頃の特徴を示しているが、焼成・器厚・器面調整などの点で、一般の土師器と較べると異質なものを感ぜさせる。それは小塚古墳の性格と密接に関連するものかもしれない。そして、小塚古墳の時期は出土遺物から第ⅡB段階頃で、雷神山古墳とほぼ同じか僅かに遅れるものと推定される。

遠見塚古墳：広瀬川左岸の自然堤防上に立地する全長110m・後円部高6.5m・前方部高2.5mの前方後円墳で、幅22～42mの周溝がめぐっている。主体部は粘土槨2基で、埋葬施設は割竹形木棺と推定される。棺の痕跡の幅は約1.1m、墓壇掘り方は幅11mである。両槨の両端下部には礫を詰めた暗渠排水溝があり、前方部の方へぬけている。東郭から副葬品として管玉1点・小玉4点・竹製黒漆塗りの堅櫛20点が出土している。

遠見塚古墳の時期を知る上で参考となる資料は、第2次調査で主体部から出土した丹塗りの底部穿孔土器(第63図8)と第1・5次発掘調査で墳丘外表から出土した縦位浮文有段口縁壺・

第3次発掘調査第12トレンチ自然溝斜面上部で発見された第Ⅰ土器群などがある。この中で、第Ⅰ土器群は西側周湟外縁と接する溝上部のやや平坦な部分から「壺形4個体・甕形40個体・台付甕2個体・高坏6個体・坏3個体」が出土したもので、そのうち壺2個体・坏3個体・甕3個体の実測図が公表されている(第52図下段)。この土器群は「単なる廃棄土器群と考えられないところがある。遠見塚古墳の造営の前後における何らかの祭祀との関係も考えられる」と理解されているものである。この第Ⅰ土器群は「塩釜式土器の諸段階」で述べたように、第ⅡA段階に位置づけられる。

墳丘外表から出土した縦位浮文有段口縁壺はいずれも破片であるが7点ある。これらの縦位浮文は断面三角形で素面のものである。縦位浮文は第Ⅰ段階の戸ノ内遺跡例では刻目をもつものの、断面円形の一条だけのものは清水遺跡例でみられるように第Ⅲ段階まで続く。その点、多条で断面三角形であることから、第Ⅰ段階に後続するもので、第ⅡA段階頃のものとして推定される。

主体部から出土した焼成前底部穿孔壺も破片であるが、底径10cmと推定され、同時に出土した同一個体の頸部とともにかなり大形の壺と考えられる。外面は細かな刷毛目が施され丹塗りされている。底部孔は穿孔後、仕上げケズリもしくはヘラミガキ状の調整が加えられている。この種の比較的丁寧な仕上げの壺は第ⅡA段階頃のものではないかと考えられる。

以上、第Ⅰ土器群・墳丘外表・主体部出土土器を検討したところ、いずれも第ⅡA段階もしくは第ⅡA段階頃に位置づけられ、相互に矛盾はみられず、遠見塚古墳の時期もその頃に求められる。

青塚古墳:大崎平野の中央部、古川市塚ノ目の自然堤防上に立地している。墳丘の現状は直径55～60mの円墳状をしている。しかし、発掘調査によって周湟幅が現墳丘の北側で約37m、南側で約65mで、南側周湟が北側周湟の約2倍であることが確認された。また、現墳丘南側の青山氏宅南端部分で、前方部側縁墳麓かと推定される周湟状落ち込みを確認した。調査範囲が狭いため確実性に欠けるが、周湟が墳丘に沿った規則的なあり方を示すと仮定すれば、全長80～90m前後の前方後円墳となる可能性は多分にある。また、円墳部は下部を地山削り出し、上部を積土によって築いている。

遺物には墳丘外表および周湟から出土したもの、発掘調査以前に故佐佐木忠雄氏によって採集されたものがあり、土師器坏・壺・甕・台付甕・底部穿孔土器(壺)などがある(第65図)。坏は埴状のもので、内外面ヘラミガキで仕上げられている(1)。壺は有段口縁で(2～4)、頸部に素面凸帯のめぐるもの(5・6)がある。甕は全体の器形が不明しい。坏や壺は第ⅡA段階の特徴を示している。底部穿孔土器(壺)は6点ある。大部分のものは底径8～11cmで、大形の壺と推定されるが、22は15.5cmと非常に大きく、雷神山古墳の壺形埴輪に近い大きさを示している。

以上のように、青塚古墳は発見された土器から第ⅡA段階に位置づけられるが、古墳をとりまく周辺の遺跡からも同時期の遺物が多量に出土している(『青塚古墳報告』「古墳周辺の出土の土師器」)。

夷森古墳:大崎平野西側の宮崎町米泉に位置し、台地上に立地する直径50m・高さ約11mの円墳である。墳丘外表は葺石に覆われている。墳麓付近から高坏脚部1点と焼成前底部穿孔土器(壺)2点が採取されている(第65図1～3)。高坏脚部は小さな円窓をもち、外面はヘラミガキされており、第ⅡB段階頃の特徴を示しており、夷森古墳の時期もその頃と推定される。底部穿孔土器(壺)は底径が9・10.5cmで、大形の壺と推定される。

峰谷森古墳:大崎平野東側で、小牛田町中心部西側の独立小起伏丘陵上に立地する現存規模約20m・高さ5～6mの円墳である。有段口縁壺の口縁下部と肩部の破片が藤原二郎氏によって採取されている(第63図7)。口縁部は軽く外反し、外面はヘラミガキされている。口径約33cm前後の大形壺と推定される。器形・器面調整から第ⅡB段階頃と推定される。また、峰谷森古墳の立地する丘陵南斜面は山前遺跡である。山前遺跡は堰状施設を伴う大溝によって囲まれた集落跡である。

前期古墳の特性と周溝墓との関係

宮城県内の前期古墳については上述の通りである。現在確認されているだけでも伊具盆地・仙台平野(名取川兩岸の宮城野・名取平野)・大崎平野にみられ、伊具盆地では第Ⅲ段階以前、仙台平野・大崎平野では第ⅡA段階には出現していることが明らかである。また、第ⅡA段階の遠見塚古墳・青塚古墳はそれぞれ仙台平野・大崎平野中央部に立地し、全長110m・80～90m(推定)と大規模なもので、広い地域(一平野全体もしくはその中のまとまりある範囲)を統括した首長墓としての性格が強い。それは伊具盆地でも同様で、関ノ内古墳を含む横倉古墳群は盆地中央部にあり、その主墳である全長約66mの吉ノ内古墳も第ⅡA段階に遡る可能性は多分にある。したがって、第ⅡA段階の頃にはそれぞれの地域において前方後円墳に象徴される支配体制がほぼ成立したものと考えられる。さらに第ⅡB段階になると、仙台平野の愛島段丘東縁に立地し、一望のもとに北・東・南方を見渡せる場所に、全長168mの雷神山古墳が築かれ、その地域支配体制はさらに大規模なものに統括されたと推定される。すなわち、仙台平野において前方後円墳は遠見塚古墳から雷神山古墳へと一段と大規模化するのに対し、大崎平野では青塚古墳をしのぐ古墳は築造されず、同程度かそれ以下の規模に留まるのである。それは伊具盆地においても同様である。

一方、大規模な前方後円墳に象徴される地域支配とともに、古墳時代前期には宇賀崎1号墳・関ノ内古墳などに示されるような20m前後の小規模な方墳や円墳が存在する。この種のものとしては名取市上余田の天神塚古墳をあげることができる(恵美昌之:1981.3)。天神塚古墳は

23×30m程度の小規模な方墳で、壺形埴輪の頸部が発見され、第ⅡB段階かそれ以降のものと推定される。このように、広い地域を統括する大規模古墳と併存して小規模古墳も築造され、それらは確認されたものこそ未だ少ないが、かなりの数にのぼるのではないと思われる。これらの前期古墳は単独で存在するものが多く、横倉古墳群のように群集するものがあったとしても前期から中期へと長期間にわたって形成されるという特徴をもっている。このような特徴は既に検討した周溝墓のあり方と基本的な点で相違している。しかし、その中で規模・構造の点で際立った姿を示す前方後方形周溝墓、陸橋部をもつ方形周溝墓等は小規模古墳と共通する面がみられ、首長層の階層として重複する部分があるのではないと思われる。このようにみえてくると、古墳時代前期の首長層には、周溝墓に代表されるような単一もしくは少数の集落を統括する首長層、小規模古墳に代表される少数の集落もしくはかなり限定された地域を統括する首長層、大規模古墳に代表される一盆地・一平野もしくはその中のまとまりをもつ一地域を統括する首長層など、かなり多様な階層が存在したものと考えられる。そして、第Ⅰ段階から第ⅡA段階を経て第ⅡB段階には雷神山古墳が示すように広い地域を統括する大首長を登物させたものと思われる。その過程は、首長層間の階層差を拡大させながらそれぞれの首長層を併存させ、かつ統括するという特質をうかがわせる。

以上のような支配体制が、序々にかつ急速に古墳時代前期の社会で進展したものと推測されるが、未だ不明な点も多い。すなわち、現在の所宮城県内では第Ⅰ段階に属するものとして、仙台市戸ノ内遺跡の方形周溝墓が1基確認されているだけで、第ⅡA段階の遠見塚古墳との間には隔絶したものがある。また、周溝墓・小規模古墳と大規模古墳の間を埋める中規模古墳、すなわち、一平野の中のまとまりある一地域の首長層については、少なくとも仙台平野では未解明である。現在の所、この問題を積極的に解明できる確実な資料は未だ蓄積されていない。このような状況の中で、仙台平野の南部愛島段丘北東縁に立地し、名取平野を一望のもとに見渡せる場所に位置する飯野坂前方後方墳群は重要な意味をもつものと考えられる。すなわち、全長60m前後の前方後方墳が5基存在する。そのうち薬師堂古墳の後方部裾から恵美昌之氏によって壺形埴輪の頸部と推定される大破片が1点採取されている。この資料に従えば、薬師堂古墳は第ⅡB段階以降のものと考えられる。また、東北地方の前方後方墳で発掘調査が行なわれたものとして福島県双葉郡浪江町本屋敷古墳群第1号墳（伊藤玄三他：1982～1984.3）、同県耶麻郡塩川町十九壇古墳群第3号墳（中川・大川原・小滝・中村・穴沢：1973.2）・山形県置賜郡川西町天神森古墳（藤田有宣：1984.2）があり、いずれも塩釜式土器を出土し、古墳時代前期のものである。この中で、本屋敷1号墳は後方部主体部および外表から第Ⅰ段階の土器がまともに出土し（第65図）、現在まで知られている東北地方の古墳で最古のものである。このような前方後方墳の諸例から、飯野坂古墳群も古墳時代前期を中心として築かれたものと推定

される。そして、第ⅡB段階の薬師堂古墳を除いた他の4基の中には本屋敷1号墳のように第Ⅰ段階に遡るものがあったとしても不思議ではない。第Ⅰ段階に属する古墳が、東北地方にあっては前方後方墳に限られるのか、それとも前方後円墳も成立するのかは今後の課題である。この種の中規模古墳が仙台平野において遠見塚古墳の前段階に存在した可能性は多分にあり、その一例として名取川南岸の飯野坂古墳群が検討の対象となろう。

なお、本書で紹介した焼成前底部穿孔土器の他に、宮城県内では栗原郡築館町照明寺蔵(加藤孝他:1970.11)・加美郡中新田町熊野堂遺跡出土のもの(1985年度東北学院大学考古学研究部調査)がある。焼成前底部穿孔土器によって、照明寺付近遺跡・熊野堂遺跡に周溝墓もしくは小規模古墳の存在が予想される。

また、仙台平野・大崎平野・伊具盆地・さらには今回触れることができなかった円田・村田・白石盆地・亘理平野における具体的な歴史的展開、また相互の関係については資料が蓄積された段階で検討を加えることにしたい。今回は塩釜式土器の編年を基軸にして、周溝墓・古墳・集落・地域社会のあり方について検討したが、資料的には未だ満足できる段階とは言えない。したがって、土器の編年についてもさらに資料を蓄積し、より確実なものにしていきたい。そのことによって、古墳時代前期社会の詳細かつ具体的な分析が可能になるものと思われる。

(注) したがって、多賀城跡五万崎地区の方形周溝墓S D993は第ⅡB段階の可能性もある。

引用文献

- 伊藤玄三他(1982~1984.3):「本屋敷古墳群発掘調査概報」1~3 P.1~39 P.1~35 P.1~40
法政大学文学部考古学研究室
- 岩渕・田中(1976.3):「安久東遺跡発掘調査概報」『仙台市文化財調査報告書』第10集
P.1~68
- 岩渕康治他(1976.3):「史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報」『仙台市文化財調査報告書』
第11集 P.1~17
- 岩渕・田中・結城(1977.3):「史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報」『仙台市文化財調
査報告書』第12集 P.1~20
- 氏家和典(1957.3):「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』 P.1~14 東北史学
- 氏家和典(1972.3):「南奥羽地域における古式土師器をめぐって」『北奥古代文化』第4号
北奥古代文化研究会
- 恵美昌之(1977.3):「史跡 雷神山古墳」『名取市文化財調査報告書』第3集 P.1~12 P.L.
実測図
- 恵美昌之(1978.3):「史跡 雷神山古墳」『名取市文化財調査報告書』第5集 P.1~17
図版 実測図
- 恵美昌之(1979.3):「十三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書』第6集 P.1~26 図版
- 恵美昌之(1981.3):「天神塚古墳」『名取市文化財調査報告書』第10集 P.2~6
- 太田・氏家(1980.3):「宇賀崎1号墳」『宮城県文化財調査報告書』第67集 P.183~216
- 太田昭夫(1980.9):「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第71集 P.289~369
- 太田昭夫(1981.3):「青塚古墳」『宮城県古川市文化財調査報告』第5集 P.1~31
- 加藤 孝他(1970.11):「伊治城跡出土遺物目録並文献資料」『伊治城資料』第2集 No.191
No.193 築館町文化財保護委員会
- 加藤道男(1980.3):「東館遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第65集 P.243~304
- 工藤哲司(1981.3):「史跡遠見塚古墳」『仙台市文化財調査報告書』第26集 P.1~24
- 小井川和夫(1978.2):「今熊野遺跡」『どるめん』第16号 P.73~79 J I C C 出版局
- 佐佐木忠雄(1977.4):「青塚古墳とその周辺遺跡」『初期古代東北の研究』P.97~166
図版 14~23
- 斎藤吉弘(1979.3):「宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第59集 P.1~68
- 篠原・工藤他(1980.8):「今泉城跡」『仙台市文化財調査報告書』第24集 P.1~82
- 仙台市教委(1983.12):『戸ノ内遺跡発掘調査説明会資料』P.1~10
- 多賀城市教委(1983.10):『新田遺跡』現地説明会資料 多賀場市教育委員会
- 田中則和他(1981.12):「六反田遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第34集 P.362
- 高倉敏明(1981.3):「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第2集 P.1~57
- 手塚 均(1980.3):「留沼遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第65集 P.153~221
- 手塚 均(1981.9):「鶴ノ丸遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第81集 P.359~421
- 土岐山武(1980.9):「安久東遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第72集 P.1~112
- 中川・小川・鈴木(1960.5):「仙台付近の第四系および地形(1)」『第四紀研究』
第1巻 第6巻 日本第四紀学会
- 中川・大川原・小滝・中村・穴沢(1973.2):「塩川十九壇古墳群調査報告」『福島考古』第14号

P.53～73 福島県考古学会

- 長橋 至(1981.3): 「下槇遺跡」『山形県埋蔵文化財調査報告書』第39集 P.1～20
丹羽・柳田・阿部(1974.3): 「西野田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第35集 P.18～166
図版1～29
丹羽・小野寺・阿部(1981.3): 「清水遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第77集 P.1～540
丹羽 茂(1983.3): 「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集 P.69～213
早坂・渡部(1985.1): 「戸ノ内遺跡の方形周溝墓」『えとのす』第26号 P.89～99
新日本教育図書株式会社
藤田宥宣他(1984.2): 「天神森古墳」『川西町文化財調査報告書』第6集 P.1～33
藤沼邦彦(1971.3): 「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集 P.91～104
古川一明(1983.3): 「色麻古墳群」『宮城県文化財調査報告書』第95集 P.131～134 図版16
宮城県多賀城跡調査研究所(1978.3): 「多賀城跡—昭和52年度発掘調査概報—」『宮城県多賀城跡調査研究所年報』P.1～40 図版 8・9
宮城県文化財保護課編(1976.3): 『山前遺跡』P.1～59 小牛田町教育委員会
山田 稔他(1978.3): 「関ノ内古墳」『宮城県角田市文化財調査報告書』第2集 P.6～14
結成・工藤(1978.3): 「史跡遠見塚古墳」『仙台市文化財調査報告』第18集 P.1～42
結城慎一(1980.3): 「史跡遠見塚古墳」『仙台市文化財調査報告書』第20集 P.1～12
結成・工藤(1984.3): 「史跡遠見塚」『仙台市文化財調査報告書』第15集 P.1～36

参考文献

- 安達厚三・木下正史(1974.10): 「飛鳥地城出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻 第2号
P.1～30
伊東信雄編(1964.9): 『会津大塚山古墳』P.1～180 図版 1～33 会津若松市
学生社復刻版(1975.5)
伊東信雄編(1981.6): 「古墳時代」『宮城県史』34 P.189～207
石野博信(1983.3): 「古墳出現期の具体相」『考古学論叢』P.21～131 関西大学
石野博信・都出比呂志(1984.1): 「古墳の発生と発展」『東アジアの古代文化』第38号 P.2～49
上田宏範・中村春寿(1961.3): 「桜井茶臼山古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書』
第19冊 P.1～89 図版 1～24
氏家和典(1984.12): 「宮城の古墳」『宮城の研究』第1巻 P.306～353 清文堂
大村 直(1982.8): 「東国における前期古墳の再評価」『物質文化』第39号 P.1～19
物質文化研究会
小林行雄(1956.11): 「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京部大学文学部五十周年
記念論集』『古墳時代の研究』P.163～190 青木書店刊再録
末永雅雄・小林行雄・中村春寿(1938.10): 「大和に於ける土師器住居址の新例」『考古学』
第9巻 第10号 P.481～490 東京考古学会
田中 琢(1965.) : 「布留式以前」『考古学研究』第12巻 第2号 P.10～17
都出比呂志(1979.12): 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』第26巻 第3号 P.17～34
都築みどり(1983): 「元屋敷式土器の再検討」『南山考古』2 P.13～32
宮城県教育庁文化財保護室(1973.3): 「金剛寺貝塚・今熊野遺跡調査概報」『宮城県文化財調査
報告書』第33集 P.1～46
横山浩一(1959.11): 「土師器」『世界考古学大系』3 P.125～132 平凡社